

42418

教科書文庫

4
810
42-1938
20000 66888

S.13  
1938.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

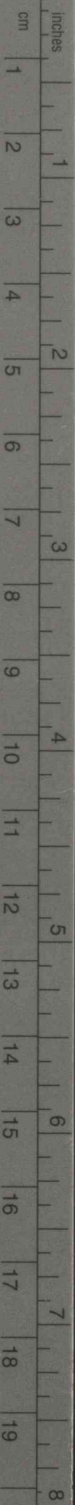


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



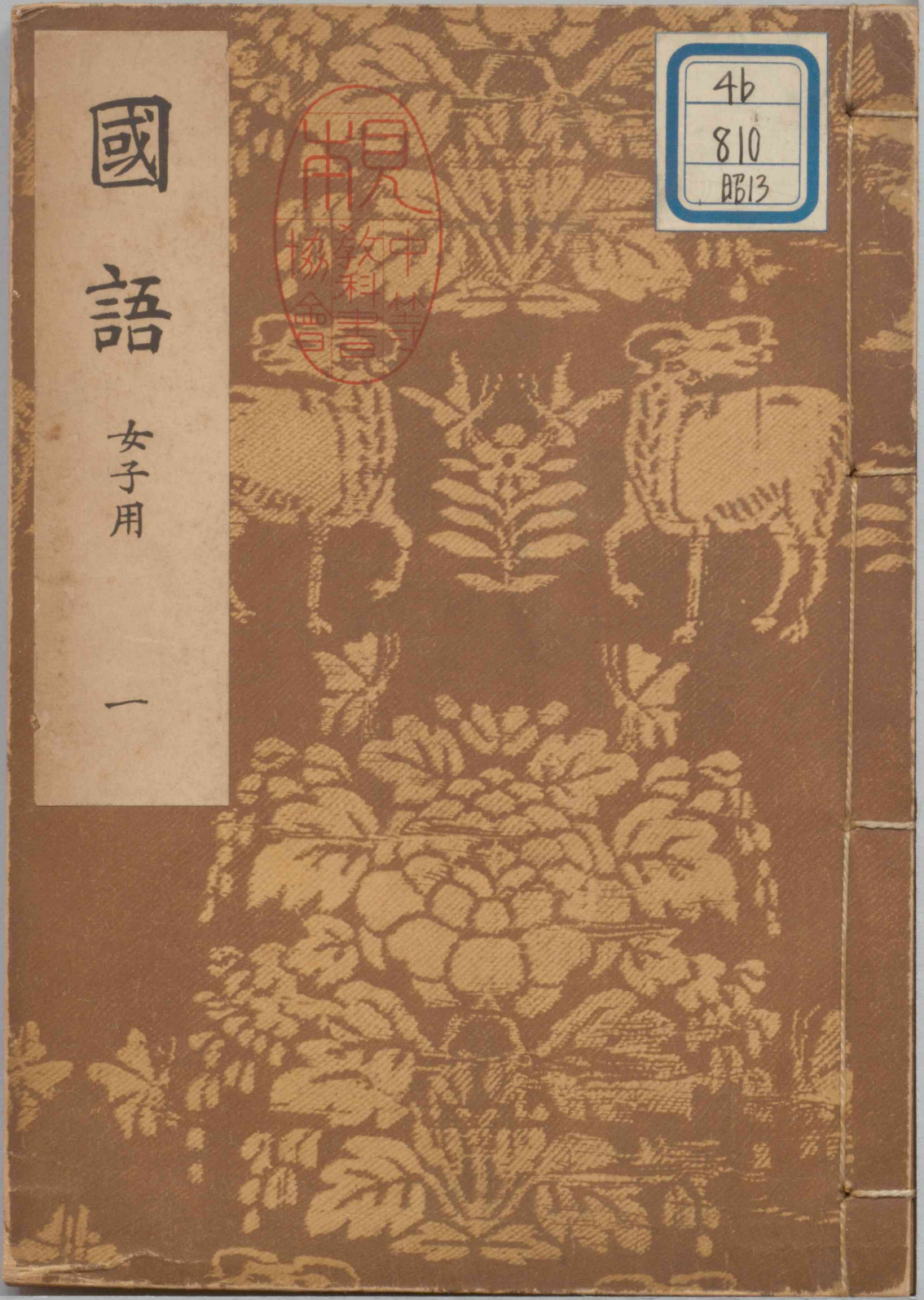
4b
810
BB13



國語

女子用

一





資料室

日五月二十年三十和昭

濟定檢省部文

用科語國校學女等高

岩波編輯部編

國

語

女子用

岩波書店刊



46  
810  
BB13



一八	良寛さま	北原白秋	一三七
一九	かるさんと米	島木赤彦	一三三
二〇	一粒の米	山本有三	一三〇
二一	用水	(遺老物語)	一三七
二二	藤樹先生	橘南谿	一四二
二三	詩二篇	室生犀星	一五〇
	菊		一五〇
	山脈		一五一
二四	八丈島行幸	藤原咲平	一五二
二五	國歌	田邊尙雄	一五八



國語 女子用 卷一

一言葉

人間の原始時代には、自分の心を他に傳へるのに、物を指示したり、身振や表情をしたりして相手にわからせたもので、今日のやうな音聲としての言葉を發達させたのは後のことである。勿論、ひどく驚いた時や急に何かを感じた時などに、思はず叫び聲を發するといふやうなことは原始時代にもあつたであらう。けれ



ども、それを「驚いた」とか、「嬉しい」とか、「悲しい」とか、いふやうな意味のある音聲即ち言葉で言ひ表すに至つたのは、ずつと後のことである。

今日一般に言葉といへば、誰でも單純に、意味のある音聲としての言葉を思ひ浮かべる。けれども、日常實際に用ゐられてゐる言葉は、そんなに簡單なものではない。例へば、私どもが日に幾度となく口にしてゐる「はい」といふ言葉にしても、それは極めて簡單明瞭な國語の一つであるけれども、これが用ゐられてゐる有様を精しく注意してみるとなかく、複雑なもので、一見同じやうな「はい」でも、その遲速・高低・抑揚等によつて、そ

こに現れる心持は同じではない。更に、それを唯、上の空でいふか、心の底からいふか、ほんの口先でいふか、おぼろげな正しさを正していふかによつて、それ／＼著しい違ひを生じてくる。かういふ事實は、この一語に限るものではなく、多くは指示や身振や表情や動作と切り離すことの出来ない關係で結びつき、時には又、唯肯くだけて同意を表し、直ちに行動をとつて了解したことを示すといふやうに、獨立した身振や動作を交へて一つの纏つた談話を成立たせることも珍しくはない。

かうして、日常行はれてゐる談話は、單なる音聲としての言葉だけではなく、それを中心としてさまざまにな



要素が結びついたり、交つたりしてゐる複雑なものであつて、それに應じて、同一の言葉も、異なつたさまざまの意味を成立たせ、そのそれと、は、知らずく、の間にその時その場合に於けるその人の「人間」を表してゐるものである。のみならず、井戸水は汲めば汲むほど新しい良い水が出て来るやうに、言葉も常にその人のまことが現れるやうな言ひ方をすれば、おのづからその人の「人間」が伸び、その人のまことが充ちて来るものである。

言葉はかういふやうに、話す人の「人間」を表すと共に、それによつて、「人間」を育てるものでさへあるから、随つ

てこれを聴く人に及す影響も深く大きい。ふと耳にしたたつた一つの言葉が、その人の一日を或は明かしくし、或は暗くするといふやうなことは、我々の往々経験するところである。かう考へて來ると、あの良寛が座右の銘にしてゐたといふ「愛語」の中に、

むかひて愛語を聴くは、おもてをよるこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語を聴くは、肝に銘じ、魂に銘ず。

とあることも深く肯かれる。

國語の學習は、主として文を読み、文を作ることである。けれども、その文は言葉を文字に書き表したものの

良寛  
禪僧  
歌人  
越後國(新潟縣)の人  
天保二年(二四九一)歿  
年七十四  
愛語  
道元禪師の正法眼藏菩提薩埵四攝法の一節



に外ならないから、平生、言葉をよく話し、よく聴くことが何よりも有力な、その根柢でなくてはならない。日常話したり聴いたりしてゐる言葉を疎かにして置いて、唯文を読み、文を作ることにだけに努めるのは、ちやうど根のない植物を育てようとするやうなもので、眞に生きた國語の力を成長させることにはならないであらう。

二 櫻

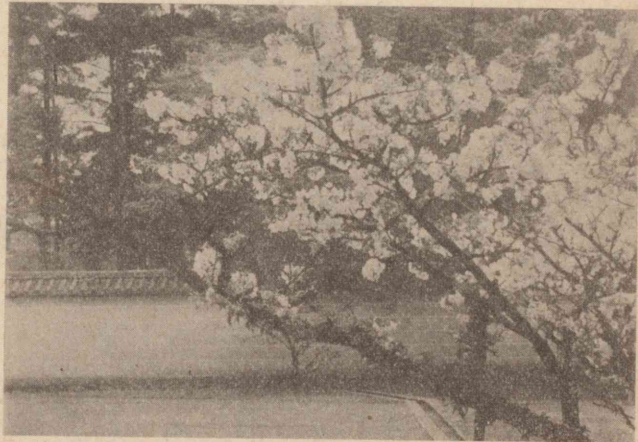
芳賀 矢一

芳賀 矢一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學  
教授  
帝國學士院會  
員  
昭和二年  
卒  
年六十一

梅といひ、牡丹といひ、芍藥といひ、菊といひ、花の名には漢字音そのまゝのものが少くない。これらの多くは、支那の文明と共に日本に渡來したものであらう。また、コスモスといひ、パンジーといひ、ベゴニアといひ、アネモネといひ、チューリップといひ、西洋渡來の草花も近來は色々ある。どれもく美しく愛らしいものであるが、やはり、我々日本人が國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷に満ち、雲とまがひ雪とまがふ景色は、日本



固有の美景である。



仁和寺の櫻

い日本の風土に最もよく釣合つて、深山都市、どこにあ

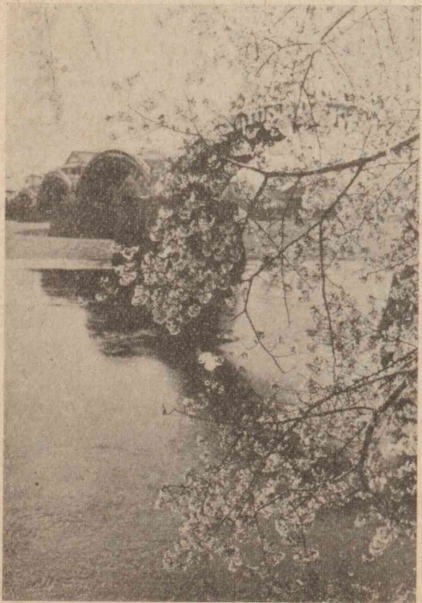
櫻の花の色は極めてあつさりとしてゐる。しかし純白ではない。いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無数の花を著けて、咲く時は一時に爛漫と残りなく咲く。上品な大宮人の風もあり、楚々たる野趣も添はつてゐる。空青く水清

空に知られぬ雪  
櫻ちる木の下  
風は寒からで  
空に知られぬ  
雪ぞ降りける  
(拾遺集)

照りもせず云々  
照りもせず曇  
りもはてぬ春  
の夜の朧月夜  
にしくものぞ  
なき  
(新古今集)

つてもよい。二十日草の長い盛りもなく、薔薇の高い  
香氣もないが、空に知られぬ雪と降り散つては、一段の  
風趣、再び世界を花の中に包んでしまふのである。日  
本の花の中の花は  
櫻である。

櫻の咲くのは春  
の半ばである。春  
の日本は水蒸氣が  
多い。どんよりと  
曇つて、寒くもなく暑くもない花曇、照りもせず曇りも  
せぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色



錦帯橋の櫻



賀茂眞淵  
國學者 歌人  
遠江國(静岡  
縣)の人  
明和六年(二  
四二九)歿  
年七十三

久方の  
紀友則の歌

である。そよ／＼と面を吹くや春風、春の特色はどこまでも、駘蕩たる點にあり、溫和な所にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵もない所にある。櫻はこの時候にはぐくまれて咲き出でる花である。際立つた特色のない所が即ちその特色である。賀茂眞淵は

うらうらとのどけき春の心より匂ひ出  
でたる山櫻花

といつた。春の日は永い。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく  
花の散るらむ

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大

百敷の  
新古今集の歌

吉野山  
八田知紀の歌  
吉野山  
奈良縣吉野郡  
の南部に横た  
はる大峯山脈  
の一支脈

宮人の悠揚迫らぬ様子が想ひやられる。

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざし  
て今日もくらしつ

牛車ぎしゃの歩み

おそく花見

てかへる黄

昏の景さな

がらの繪巻物である。



(筆仙溪田富) 風春野吉

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限り  
は櫻なりけり

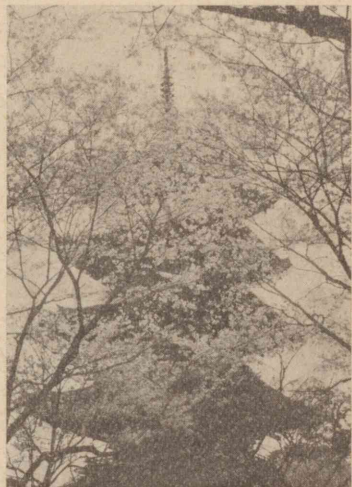
これは満山花に包まれた吉野山の景色である。



花の雲  
松尾芭蕉の句  
上野  
現東京市下谷  
區上野公園一  
帯の地  
東叡山寛永寺  
の寺界  
淺草  
現同市淺草區  
淺草公園附近  
一帯の地  
金龍山淺草寺  
の寺界  
鐘一つ云々  
鐘一つ賣れぬ  
日はなし江戸  
の春  
(板本其角)

花の雲鐘は上野か淺草か

これは鐘一つ賣れぬ日もなき大都會の花に掩はれた  
光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫す



櫻の野上

る花ではなくして、木と  
して賞翫する花である。  
否、多くの木を集めて、人  
は唯花中に在つて賞翫  
する花である。上から

見て愛でる花ではなくして、下から眺めて愛でる花で  
ある。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となる  
のである。

(月雪花)

三 曙の富士

小泉 八雲

日の出の少し前、雲のない四月の朝の透きとほる暗  
さをすかして、彼は再び故國の山々を見た。黒い海の  
上に紫紺色に聳え立つ、遠く高い連山を見た。彼を長  
い異郷の旅から連れ歸りつゝ、あつた汽船の後方では、  
水平線が徐々に薔薇色の光で染められていつた。甲  
板の上には既に若干の外人が、太平洋上の曙の富士の、  
又なく美はしい姿を見ようと待ち構へてゐた。  
彼等は長い山脈のうねりを見つめた。そのぎざぎ  
ざした連峯の彼方の深い夜を覗いた。そこにはまだ

小泉八雲  
ラフカヂオ、  
ハイン  
文學者  
東京帝國大學  
講師  
イギリス人  
後日本に歸化  
明治三十七年  
歿 年五十五



星が微かに瞬いてゐた。——しかし、富士の姿はどこにもない。

その時一人の船員が叫んだ。

「あゝ、あなた方は眼のつけ所が  
の 低過ぎます！ もつと高い所を  
富 御覽なさい、もつと高い所を！」と。  
士 彼等は高くく、空の眞中近くま  
で眼を上げた。その刹那、曙の色  
で幻の蓮華の苔のやうに淡紅く  
染まつた、偉大な山頂が眼に入つた。その壯觀に彼等  
は沈黙してしまつた。太陽の光線が、地球の圓みを越



え、暗い山脈を越え、一見、星までも越えて山頂に達すると、萬年の雪は見る／＼黄金色に變り、白色に變る。

夜は明け離れた。柔らかな青い光が一天に漲り、總べての色彩は眠から覺めた。人々の眼前には明かるい横濱の港が開けてきた。そして、麓の見えぬ神々しい峯が唯一つ、雪の精のやうに大空に高く懸つてゐた。長い旅路の後に再び故國の土を踏まうとしてゐる彼の耳には、先刻の「あゝ、眼のつけ所が低過ぎる！ もつと高い所を……もつと高い所を！」といふ叫が、胸の中にむく／＼と押上げてくる情緒に伴なつて、一種の節奏をなしてまだ繰返されてゐた。

(心)



明治天皇  
御諱は陸仁  
第百二十二代  
明治四十五年  
崩御 寶算六  
十一

四 明治天皇御製

庭若草

蓬とも菊ともわかず春の日のいまだみ  
じかき庭の若草

旅中花

野も山も花のさかりになる時をうれし  
く旅にいでにけるかな

海邊夕立

かきくもり降るゆふだちに荒磯の波も  
しばしは音をかりけり

故郷草花

園守やひとりみるらむ昔わが集めし庭  
の秋草の花

雪滿群山

大空はみどりにはれて山といふ山みな  
しろく雪ふりにけり

旅中情

國民のむかふる見れば遠くこし旅のつ  
かれも忘れにけり

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの  
敷島の國はうごかじ



中川一政  
畫家 詩人  
明治二十六年  
生

五 希 望

中 川 一 政

われはいまは飛び得ざれども、  
いつかは雲の中にすむ。  
われはいまは飛び得ざれども、  
あの青雲の中をおもふ。  
雲の中にわが家がある。  
飛ぶことを得ざる雛鳥は、  
手をのべ、足をのべ、  
つねに飛ぶことを考へる。

空にながるる雲のはたて、  
伸べれば雲に入るわれのからだ。  
悠々とした春の日に、  
希望は胸にみちてくる。  
手を伸べ、足を伸べ、  
飛べるかしらん。  
飛べるかしらん。  
いつかは自由な鳥になつて、  
いつかは雲の中に入る。

〔出所〕  
詩集「見なれ  
ざる人」



鍋木清方  
名は健一  
畫家  
帝國藝術院會  
員  
明治十一年生

六 きいろい花

鍋木清方

都會にばかりあると、春の花といつても、梅か櫻か、朝夕庭前に見るものだけしか考へないが、田舎へ行くと、李だの、杏だの、あけびの花だの、春蘭だのと、常の住宅地ではちよつと見當らない花に出あふ。しかし、凡そ田舎へ來たことを沁々感じさせる花の色といつたら、赤・白・紫、さういふ華美な色あひよりも、鄙びて明かるい寂びしさを思はせる黄色である。廣々とした菜の花畑、丘の蒲公英、それらには、他のどんな花よりも、憂を知らぬ春の姿といつたやうな風情が宿されてゐる。

遠山の雪もまだ消えない時分、防風林をめぐる枯笹の籬の中から、鶯の初音につれて、いちはやく花をつけるものに、連翹・臘梅がある。

うすものの、瓔珞を下げたやうな淡黄の花を植物園で見て、「とさみづき」といふ名を知つた。細工の手のこんだ鼈甲の前差のやうに美しく、これは野山の木かも知れないが、箒目の美しい數寄屋造の中庭にでも植ゑたいと思つた。

だが、菜の花や蒲公英は生えぬきの田舎育ちである。菜の花畑の中へはひつてゆくと、曇日にも花のあたりが明かるく、むせるやうな強いにほひに包まれる。そ



のにほひは、梅や水仙の香りとは違つて、何處までも田舎の土に生まれたにほひだ。

蒲公英は都會の土手にも芝生にも珍しくはないけ



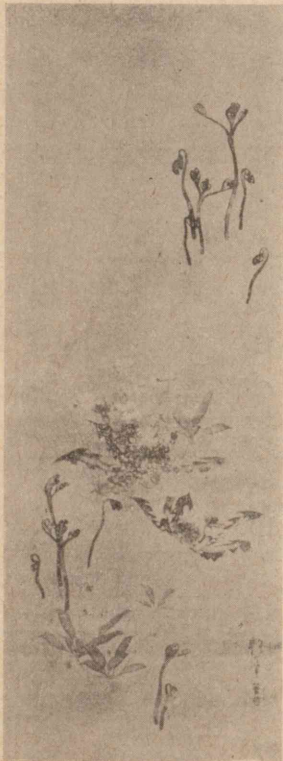
(筆一抱井酒) 花の菜

れども、思ひなしか、田舎の野面に春の

日を浴びて、惜し氣もなく咲き満ちた姿ほどには、伸び伸びとした自由さが見られない。

私は、田舎へゆくと、蒲公英の敷物のなかに大の字形に倒れ、蒼空を仰いで朗かな大氣を呼吸するのを何よ

りの樂しみにしてゐる。敷物の模様に見えるその花のあまり見事に咲き揃つてゐるところは、よけても二つや三つはつい下敷になつてしまふ。それでも、身體を起した跡では、莖さへ短ければしばらくして花も亦



(筆一抱井酒) 英公蒲

起き直る。天氣が悪いと、機嫌が悪いやうに、花

瓣は固く閉ぢてむつつりした顔つきをしてゐるが、雨の後でも、日の光さへ漲れば、一ぱいな生活力を見せて愉快に笑ふ。



この花は、田舎育ちのくせに、都會人のやうに朝寢である。晴れた日でも、朝のうちは蒼んでゐるし、夕づけばまた眠つてしまふ。

花の過ぎた後は、莖がすく／＼と伸びて、雪の花をまゐるくかゞつたやうな冠毛の球が出来る。いたづらごころに、ふつと吹いてみると、種子を宿した臚の鞠は跡もなく陽炎のなかへ飛び散つて、ぼつ／＼と穴のあいたうてなばかりが残る。

菜の花が田舎娘なら、この蒲公英の花は村のいたづら小僧であらう。

(築地川)

中勸助  
小説家  
明治十八年生

七夕がたの遊

中 勸 助

あの静かな子供の日の遊を心からなつかしくおもふ。そのうちにも楽しいのは夕がたの遊であつた。ことに夏のはじめなど、日があか／＼と夕ばえの雲になごりをとゞめて暮れてゆくのを見ながら、もうぢき歸らなければとおもへば残り惜しくなつて、子供たちはいつそう遊にふける。ちよんがくれにも、めかくしにも、をか鬼にも、石蹴りにもあきた友達は、汗ばんだ額に風をあてながら、  
「こんだなにして遊びませう。」



といふ。私も袂で顔をふきながら、

「かあごめかごめをしませう。」

といふ。

「かあごめかごめかあごんなかの鳥は、いついつでやる……」

雨のあとなど、首をたれた杉垣の杉の若芽に雫がたまつてきら／＼光つてゐるのが、垣根をゆすぶると、一時にばら／＼と散るのが面白い。暫くすれば、またさきのやうにたまつてゐる。

遊場の隅には大きな合歡あかの木があつて、うす紅いぼろぼろした花が咲いたが、夕がた、不思議なその葉が眠

るところになると、すばらしい蛾がとんできて、褐色の厚ぼつたい翅をふるはせながら、花から花へと氣ちがひのやうにかけまはるのが氣味がわるかつた。合歡の木は幹をさすればくすぐつたがるといつて、友達と手のひらの皮のむけるほどさすつたこともあつた。

夕ばえの雲の色もあせてゆけば、こつそりと待ちかまへてゐた月がほのかにさしてくる。二人はその柔和なおもてをあふいで、「お月様いくつをうたふ。」

「お月さまいくつ、十三な、つ、まだとしや若いな……」  
友達は兩方の手で眼鏡をこしらへて、

「かうして見ると、兎がお餅ついでるのが見える。」



といふので、私もまねしてのぞいてみる。あのほのかな、まんまるの國に、兎がひとりで餅をついてゐるとは、子供の心になんといふ嬉しいことであらう。月の光があかるくなれば、ふはく〜とついであるく影法師を追つて「影やとうろ」をする。伯母さんが、

「ごはんだからお歸りよ。」

といつて迎へに来てつれて歸らうとするのを、一所懸命足をふんばつて歸るまいとすれば、伯母さんはわざとよろ〜しなから、

「かなはん、かなはん。」

といつて騙し〜つれて歸る。友達は、

「あすまた遊んでちやうだい。」

といふ伯母さんにさやうならをして歸るみち〜、

「かいろが鳴いたからかあいろ。」

といふ。私も名残惜しくておなじやうに呼ぶ。さうして、かはる〜呼びながら、家へはひるまで呼んでゐる。

(銀の匙)



夏目漱石  
名は金之助  
英文學者  
小説家  
大正五年歿  
年五十

### 八 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。  
軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。  
向かふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇  
からつるされて、屈託氣にふらりと揺れる。下に  
駄菓子の箱が三つばかり竝んで、そばに五厘錢と文久  
錢が散らばつてゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白  
の上にふくれてゐた雞が驚いて眼を覺す。くゝ、く  
くゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈どんぐらひが今しがたの雨に

濡れて半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけ  
てあるが、土の茶釜か銀の茶釜か分からない。幸ひ下  
は焚きつけてある。



夏目漱石

返事がないから、無斷  
でずつとはひつて、牀几  
の上に腰を下した。雞  
は羽搏きをして白から  
飛び下りる。今度は疊  
の上へあがつた。障子がしめてなければ、奥まで馳け  
ぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこ  
といふと、雌が細い聲でけつこつこつこといふ。まるで



人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。牀几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐるを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第にをさまる。

暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさりりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は暢氣に燻つてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の店をあけはなしても苦にならないとみえる所が、都とは少し違つてゐる。返事がないの

に、牀几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも、少し

二十世紀とは受取れない。その上、出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見たことがある。その時、これは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ婆さんが橋懸りを五六歩來て、そろりと後向きになつて、爺さんと向かひ合ふ。その向かひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さん

寶生  
寶生流  
能樂五流の一  
高砂  
能樂の代表的  
な曲の一



(筆穂百福平) 屋茶の峠



の顔が殆ど眞むきに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はひしやりと心のカメラに焼きついてしまつた。茶店の婆さんの顔はまるでこの寫眞に血を通はしたやうだ。

「お婆さん、此處をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞおこまりでござんしよ。おゝおゝ大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら

乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と立上りながら、しつゝと二聲で雞を追ひ下げる。

こゝゝと馳け出した二羽は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛び出す。

「まあ一つ」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

「お菓子をと、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。」

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前へうづく



まる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。この邊は夏も鳴きま  
す。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は——先刻の雨で何處ぞへ逃げました。」

折柄竈のうちがばちくと鳴つて、赤い火がさつと  
風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあおあたり。さぞ御寒かろ。」

といふ。軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながら  
に、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生き返つた。」

「いゝ、工合に雨も霽れました。そら、天狗巖が見え出  
しました。」

逡巡として曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに  
吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の  
一角は、未練もなく晴れ盡くして、老嫗の指さす方に、巘  
岨と荒削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。



杉村楚人冠  
名は廣太郎  
著述家  
朝日新聞社相  
談役  
明治五年生

九 小鳥

杉村楚人冠

春眠曉を覚えぬ今日此の頃ではあるが、努めて朝早く起きて庭に下り立つて見ると、いろ／＼の名も知らぬ小鳥が樹枝に飛び移り、池の水を浴び、遠近互に啼き交してゐるのを見るのが、如何にも楽しい。

それにしても、この小鳥の名を一々知つてゐたら、さぞかし興味も深からうにと思ふが、生憎と、私はその方にかけては名だたる無學で、その上、眼が悪いから、すばやく飛び交ふ鳥の姿を見定めることが出来ない。雙眼鏡を取出す間に、大切な鳥は飛んで行つてしまふ。

たま／＼、首尾よく眼鏡の中に收め得ても、名を知らぬ哀しさ、美しい鳥、かはいらしい鳥と思ふだけである。瑠璃色をしてゐるから瑠璃で、頬に白い處があるから頬白で、尾が長いから尾長だらうぐらゐで片づける。負け惜しみかも知れぬが、まことに小鳥の自然の姿を楽しむ者は、啼聲の妙なるを愛し、羽色の美しきを愛で、飛び移る姿のやさしきを眺めてゐれば、それでよいのではないかと思ふ。

年々寄つて來る小鳥の爲に、庭の樹々に巢箱を設け、餌箱を掛け、泉水には水浴場をしつらへて置くが、巢箱には鳥が巣くつて、卵を産み雛をかへす。餌箱に入れ



て置いてやつた餌は、鳥が何の恐れげもなくついばんで行く。ひとり水浴場だけは、朝早く来るのださうだが、まだ一度も浴びてゐるところを見たことがない。たゞ、小さな美しい鳥が、朝な／＼水の中でばちや／＼と水を浴びてゐるものと、心の中にその姿を思ひ浮かべては楽しんでゐるばかりである。

勝手に來て勝手に啼いてゐる以上、何もこれを籠の中に捕へて啼かせるにも及ばぬと同じやうに、勝手に來て勝手に水を浴びて行くものを、何でもかんでも見届けなければならぬといふこともあるまい。

(續々湖畔吟)

長與善郎

劇作家 小説

明治二十一年

生

高圓寺

東京市杉並區

高圓寺

一〇 ポプラ

長與善郎

高圓寺にあつた頃のこと、庭の生垣の處に三本ばかり、かなり大木のポプラがあつた。もと田圃を埋め立てた地面なので、庭といふよりは空地に近い二十坪餘りのところに、唯やたらとつゝじを植ゑてある外には、見るべき樹木といつては、隅つこのひよろ／＼した、まばらな竹と、この三本のポプラ位のものである。

十二月にこゝに越した時分には、そのポプラも裸の時のことで、竹の葉の色も生氣を失ひ、その荒涼ともいふべき眺の中に、只一本の貧相な山茶花が紅一點を點



じてゐた。

四月になつて、ポプラは始めて點々たる楮い新芽を

吹き出した。日一日

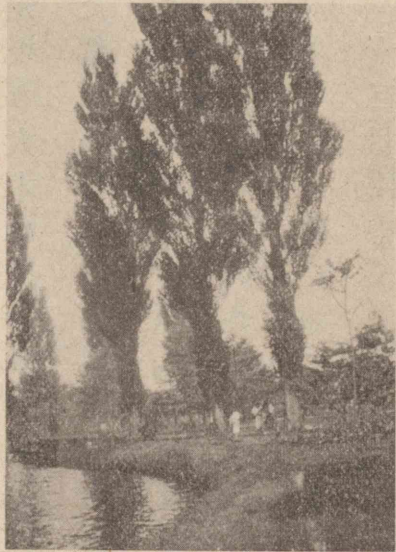
と、それは嫩葉らしく

ふくらんで行き、五月

には見事な新緑で一

杯に盛装した。初夏

に近い陽にきらめく



ポ プ ラ

その盛な青葉を眺めて、自分はその獨得なそよぎ方に  
感心した。こんなによくそよぐ首をもつた葉は他に  
あるまい。首の割に頭が重いのであらう。ちよつと

した微風にも、それは眩いばかりゆらくと旋回して、  
日光を綾にして見せる。いかにも印象派風な光彩の  
漣である。

梅雨の頃であつたか、その繁みの下に、新しく赤い屋  
根の家が一軒建つた。すると、その主人が来て、「お内の  
ポプラが自分の家の上に枝を伸ばしすぎて暗いほど  
である。暗いのは夏に向かつて差支ないが、もし大風  
でも来て太い枝が折れでもした日には、屋根が破損す  
る憂がある。どうか、少しすかしてもらひたい」と云ふ  
のだ。大家に掛合つてくれといふと、二三日して植木  
屋が二人、鋸を持ってやつて來た。そして、早速木のぼ



りをしたかと思ふと、自分がちよつと書齋に引込んでゐる間に、剪つた、剪つた、この新開地の庭としては殆ど唯一の身上であり、眺めものである美しく繁つたばかりの太い枝を、あらかた丸坊主にしてしまつたには驚いた。

「この位すかしやあ大丈夫でさ」と、うまさうに一服して眺めながら植木屋は云つた。

「うむ。さつぱりしすぎた位だ」と自分は答へた。

事の序でに、植木屋はなほ玄關前の檜にも細い丸太のつつかひ棒をかつて行つた。何分にも、地盤がじくじくである。で、彼等は御町疇にも今剪つたばかりの

ポプラの枝の中から播粉木ほどの太さを幾本か選び、それを頃合にぶつ切つたのを、更にそのつつかひ棒の根に、又つつかひ棒に打ち込んで、繩で結はへつけて行つた。

月日が経ち、又春がめぐつて來た。坊主にされたなりに見慣れたポプラが、又芽を吹く時が來た。自分はもう、去年植木屋が來て檜のつつかひ棒をかつて行つた事も忘れてしまつてゐた。がある日外へ出がけに、自分はふとそのつつかひ棒の根に眼をとめると、驚いた。その二重のつつかひ棒に打ち込んだ小さな杭の頭から、かはいらしい子豚の耳ほどの嫩葉が萌え出て



あるではないか。どの杭も、どの杭も。  
 考へてみれば、挿木で簡單につく木なのであるから、  
 別に不思議もない。が、それにしても、何と根強い生活  
 力であらう。さう感歎して、思はずそこにしやがんで  
 見た時、自分はふと、あの花咲爺の白になつた木を思ひ  
 出した。

(自然とともに)

徳富蘆花  
 名は健次郎  
 小説家  
 昭和二年歿  
 年六十

湘南  
 神奈川縣の南  
 部、相模灣沿  
 岸一帯の稱  
 神武寺  
 神奈川縣三浦  
 郡逗子町に在  
 る天台宗の寺

一一 湘南の初夏

徳富蘆花

蒼々茫々の夕

静かなるは麥刈濟む頃の田舎の夕暮なりけり。神  
 武寺に遊び、夕に及びて、獨り田間の路を辿りて歸る。  
 日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲の切れ目に一抹  
 朱をぼかせし残照も消えぬ。此處其處の畑より、村よ  
 り、山側より、麥藁焼く煙縷々として立ち上り、蓬々とし  
 て廣がり、果は山も村も茫々となりぬ。  
 静かに立ちて眺むれば、暮雲暮山の影落ちて水閣き  
 田の面に白きもの涌き出で、見る／＼田より田にはび



こり行く。麥藁焼く煙の影の、田を渡るなりけり。其の底に蛙聲あり。

日落ち、煙満ち、物は物と互に融け、恍として無我の境

に入る。人語なく、物

音なく、燈影なし。唯

蒼々たり、茫々たり。

靜かなる夕や。

獨り黄昏の底に立



徳富蘆花

ちて耳傾くれば、蛙聲獨り閑々、また啞々。

これ實に「夕」の聲なり。

夕山の百合

大山  
神奈川縣中・  
愛甲兩郡に跨  
がる  
海拔一二四六  
米

夕方後山に登る。夕風青茅を戦がして百合の花の香そこはかとなく漂ひ、丘上にしよんぼり月の影あり。日は大山の右に入りて残曛猶明らかに、金樺色の横雲ありてさながら彩旛の翻れる如く、西より北に横たふ。富士は薄き藍色の暮雲を抽きてほのかに其の頂を露し、海は紫を流して、一帆徐ろに其の面を移り行く。

村の方を望めば、此の頃まで村と村との間に照り渡りし麥は何時か刈られて其の跡黒く、田は半ば植ゑられて、緑ほのかなる新秧の田と、水のみ白き未插の田と入亂れ、一條の川、帯の如く其の中を洄りて白く光りぬ。麥刈られて、緑樹の村いよゝゝ闇し。其處にも此處に



も、麥藁焼く煙立ちのぼる。ふちく音するは、稗の焼くるなり。煙の本に紅の火閃くは、風ありて煽れるなり。見るく煙は村を包み、山を侵して、黄昏は其の中より涌きぬ。蛙聲風にのりて聞ゆ。

暮れて、山を下れば、徑を夾む青茅の一色に青黒きに、點點たる百合の花、朧夜の星の如く、ほの白う暮れ残りぬ。風そよよとして、夕山の香、袂に満つ。山の端に月光り初めぬ。



花の百合

梅雨の頃

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交、雨聲を争ふ。



頃の雨梅

雨の絶え間に出でて、麥藁まじりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、緑闇き家には人ありて梅子を落とし、畑には甘藷を植うる女あり。

田は大方植えられぬ。嫩黄田々、秧猶疎にして水多く、蛙聲四方に満つ。田より田に落つる水は、音も濁りて、ごぼごぼと鳴る。まさに梅雨の頃の水の聲なり。



川は膏の如き碧潮満々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつゝ漂ひぬ。川邊の蘆稀に穂を抽きたり。其の蘆を折り敷いて、鰻・鯊を釣る子供あり。氣重うして濃かなり。村より出づる煙の濕うて立ちも上らず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く緑重うして、滴水を落さば、色融けて流れんずるさまを見よ。

山に梟の聲あり。

雨はらくとまた降り出でぬ。

(自然と人生)

柳澤淇園

名は里恭  
大和國(奈良縣)郡山の藩主柳澤吉保の重臣  
文人 畫家  
寶曆八年(二四一八)歿  
年五十三

二二 かんになん

柳澤淇園

或人文盲なるものを意見して、世の交りは他の事はいらす、たゞ堪忍の二字をよく守るべし」といへば、文盲の人は頭を傾け、「かんになんとは四字にて侍らずや」と、指をもて數へ、「御許にはおぼしたがへなるべし。かんになんと四字にて侍り」といふ。意見せし人、愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのぶと訓みて、二字なり」といへば、また頭を傾け、「たへしのぶならば、又一字殖えたり。五字となり侍るべし。何と仰せありとも我等は四字とおもひ侍れば四字にてかんになんはいたし侍るなり」といへ

二二 かんになん

五三



るに、その人大いに憤りて、汝が如き愚昧の文盲は實に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。おのれがまゝにすべし」といへば、文盲の人笑ひて、何とも仰せあるべし。我等は、かんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり」とて、笑ひゐしとぞ。その智には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。

予が友としける平澤何某といふ士は、堪忍づよき人にして、或時、主用ありて、人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒みがきをつかひて吐きたる唾の、あやまちて平澤が著せし上下へしたゝかにかゝりたれ

ば、供人大いに憤り、その家に入り、唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤止めて、しばし、この家をかゝるべし」とて、その家に入りて、挾箱より著替の上下を取出して、著かへけるに、その家のものども、大勢出でて詫ぶるにぞ、平澤申しけるは、過なるべし。重ねて心をつくべし」とて出で行きぬ。供人、いかでそのまゝに許し置き給へるぞ」といへば、けふは大切なる主用なり。かゝる瑣細のことに隙取るべきことにあらず。わが常に守れる堪忍は、この事なり」といへり。

その後、また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏の頃にて、溝のけがれ水を打ちけるが、平澤



が袴の裾より下を穢せり。またく、供人大いに憤り、已に打擲にも及ばんとせしを、おしとゞめて行きければ、供人「いふかひなきことにて候」といふに、さにはあらず。今日は私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たる者の本意にたがへり。たゞ堪忍だにせば、世に恥辱といふことあるべからず」といはれしとぞ。

(雲萍雜誌)

雲萍雜誌

四卷

隨筆

天保十四年

(二五〇三)刊

一三 蜘蛛の絲

芥川龍之介

芥川龍之介

小説家

昭和二年歿

年三十六

或日の事でございます。お釋迦様は極樂の蓮池の縁を、一人でぶらくお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が絶え間なくあたりへ溢れて居ります。極樂は今朝なのでございませう。

やがて、お釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の



底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の川や針の山の景色が、丁度視眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

すると、その地獄の底に、韃陀多たといふ男が、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿がお眼にとまりました。この韃陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございますが、それでも、たつた一つ善い事をした覚えがございませう。と申しますのは、或時、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで韃陀多は早速足を舉げて踏み殺さうとしまし

たが、「いや／＼、これも小さいながら命のあるものだ。その命を無闇にとるといふことは、いくら何でもかはいさうだ」と、かう急に思ひ返して、とう／＼その蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひだしになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ、側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居ります。お釋迦様はその蜘蛛



蛛の絲をそつとお手にお取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐにそれをお下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一しよに浮いたり沈んだりしてゐた韃陀多でございます。何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあるかと思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございません。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて、たまに聞えるもの

といつては、唯罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。これは、こゝへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるからでございます。ですから、さすが大泥坊の韃陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

ところが、或時の事でございます。韃陀多が何氣なく頭をあげて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い／＼天上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一すぢ細く光



りながら、するくくと自分の上へ垂れて參るではございませんか。

韃陀多はこれを見ると、思はず手を拍つて喜びました。この絲に縋りついてどこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはいる事さへ出來ませう。さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられることもなく、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから、韃陀多は早速その蜘蛛の絲を両手でしつかりとつかんで、一所懸命に上へくとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでご

ざいますから、かういふ事には昔から慣れきつてゐるのでございます。

しかし、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔たつてゐますから、いくら焦つてみた所で、容易に上へは出られません。稍暫くのぼる中に、とうくと韃陀多もくたびれて、もう一たぐりもたぐれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませんから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一所懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもう何時の間にか闇の



底にかくれて居ります。それから、あのぼんやり光つてゐる恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外わけがないかも知れません。韃陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、こゝへ來てから何年にも出したことのない聲で、「しめた、しめた」と叫びました。

ところが、ふと氣がつきますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へへと一心によぢのぼつて來るではございませんか。韃陀多はこれをみると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯馬鹿の

やうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへきれさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。もし萬一途中でできたと致しましたら、折角ここまででのぼつて來た、この肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、眞暗な血の池の底からうよゝと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になつてせつととのぼつて參ります。今



の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つにきれて、落ちてしまふに違ひありません。

そこで韃陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の絲はおれのものだぞ。お前たちは、いつた誰にきいてのぼつて來た。下りろ、下りろ」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、不意に韃陀多のぶら下つてゐる所からぶつりと音を立ててきれました。ですから、韃陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくゝ廻りながら、見るくゝうちに闇の底へま

つさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きらくゝと細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れてゐるばかりでございます。

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しうなお顔をなさりながら、またぶらくゝお歩きになりはじめました。自分ばかり地獄からぬけ出さうとする韃陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を



うけて元の地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様の御目から見ると、あさましく思召されたのでございませう。

しかし、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓著致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のみ足のまはりにゆらく、萼を動かさず、その眞中にある金色の蕊からは、何ともいへない好い匂が絶え間なくあたりへ溢れて居ります。

極樂ももう午に近くなつたのでございませう。

(蜘蛛の絲)

蜘蛛の絲  
芥川龍之介全集  
第一卷所収

ヘレン・ケラー  
アメリカの聾  
啞教育家  
1890—

一四 翼ある言葉

ヘレン・ケラー

私がものいふ術を覺えたのは、一八九〇年の春でありました。それまで、人の耳に聞える聲を出して見たいといふ強い衝動が、いつも私の心のうちに潜んでおりました。私はよく一方の手を自分の喉に當て、他方の手で自分の唇の運動を感じながら聲を出してみたとがあります。私は何でも音を出すものが好きで、猫が喉を鳴らしたり、犬が吠えたりするのを手で觸つて悦びました。また、歌つてゐる人の喉や弾かれてゐるピアノに好んで手をおいたものです。元來、私は眼と



耳とを奪はれる前、盛におしやべりすることを覚え始めてゐましたが、病氣以來耳が聞えなくなつた爲にものをいはなくなつたのです。

その後もよく私は一日中母の膝に坐つて、兩手をその頬に當ててゐたものです。といふのは、母の唇の運動を感じるのが面白いからです。さうして、既にものをいふとはどんなことであつたか忘れてゐましたが、自分も唇を動かしてみるのでした。友達のいふところでは、私は普通の人の通りに笑つたり泣いたりしてゐたさうです。暫くの間、私は色々な音や片言を口から出してゐましたが、それは意志を傳へる爲ではなく

て、發聲器官の練習の爲であつたのです。けれども、たつた一つだけ私が記憶してゐた言葉がありました。それは「ウォーター」といふ言葉であります。私はそれを「ウォーウオー」と



—ラケとンアヴリサ

を「ウォーウオー」と發音してゐました。この發音さへ次第に不明瞭になつて來た頃に、サリヴァン先生が來て下さ

つたのです。私がこの音を發するのをやめたのは、自分の指で言葉を綴ることが出来るやうになつてから



後でした。

ともかく、私は久しい前から、周囲の人々が私とはちがつた思想傳達の方法を用ゐてゐることを知つてゐました。そして、聾啞の子供にもものいふ術が教へられることを知る以前から、既に、自分の持つてゐる發表の方法が不完全であることを感じてゐたのです。指先のアルファベットを唯一の便りとする者は、いつも制限された窮屈な感じからまぬかれることが出来ません。この感じが、私を悩まし始めました。そこで私の思想は屢立上つて、恰も風に逆らつて飛行する小鳥のやうに高く飛ぶことがありました。私は何とかし

て唇と音聲とを用ゐたいと努力したのです。併し、私の友達は、結局それが失望に終ることを恐れて、かうした傾向を止めようとつとめました。私は頑として聞き入れませんでした。

ところが、間もなく、この大きな障礙を打破る動機となつた一つの事件が起りました。それは、ノルウェー及びスウェーデンの旅行から歸つたばかりのラムソン夫人がお訪ね下さつて、實際にもものいふ術を覺えたノルウェーのラグンヒルドカータといふ聾で盲の少女のことを話して下さつたことです。ラムソン夫人がこの少女の話語り終らぬうちに、私の熱心は火



のやうに燃え上りました。私は、自分も亦、ものいふ術を習ひ覚えようと決心したのです。そこで、私は火がついたやうにサリヴァン先生をせき立てて、指導と助力とを仰ぐ爲に、ホレースマン学校の校長サラ・ワラー女史の所に連れて行つて頂きました。有難いことに、この優しい婦人は、自ら私を教授することを申し出て下さつたのです。

フラー女史の方法は、私の手を彼女の顔に軽く觸れさせながら發音してみせて、彼女の舌と唇との位置を感じさせることでありました。私は一つ一つの運動を熱心に眞似て、一時間の後にはM.P.A.S.T.Iの六つ

の音の要素を自分のものにする事が出来ました。フラー女史は全部で十一度授業をして下さいました。私は、自分がはじめて「暖かです」と、一つの纏つた文章を發音することが出来た時の驚と悦とを、今もなほ忘れることが出来ません。勿論、それはとぎれ／＼の吃りながらの發音ではありましたが、ともかくも、それは人間の言葉でありました。私の魂はこゝに新しい力を意識し、束縛から脱して、覺束ないながらこの口語を通して、一切の知識と一切の信念とを獲得しようとして奮ひ立つたのです。どのやうな愛の言葉も、小鳥の歌聲も、音樂の調べも、かつてその静けさを破つたことがな



ミルドレッド  
ケラーの妹



林檎にさきはるけら

い絶對の沈黙の牢獄から脱れ出ようと懸命の努力をした聾啞の子供は、今までに聞いたことのない言葉を話す爲に、最初にもいふことが出来た時の、その驚と悦とを決して忘れるものではありません。このやうな経験をを持つ人のみが、始めて玩具や石や木や小鳥や、ものいへぬ動物などに向かつて話しかける私の熱心さと、呼聲に應じてミルドレッドが走

つて來たり、犬が命令通りになつたりする時の私の悦とを、本當に理解することが出来るのです。考へてみると、通譯の必要のない、翼ある言葉を語ることが出来るのは、言ひ表しやうのない天の恵であります。かうして口を以て語る時、指の先からは、出ようとしてどんなにもがいても出て來なかつた幸福な思想が、恰も羽ばたきしながら飛び出して來るやうに思はれました。勿論私がこの短い時間のうちに、満足にもものがいへるやうになつたわけではありません。私はたゞものいふ術の要素を教はつただけで、フラー女史とサリヴァン先生とは私のいふことがわかつて、大概の人に



は百語の中一語もまだく聞き取れなかつたであらうと思ふのです。しかもこれらの基本的要素を覚えただ後に於てすら、なほ残りの全部を私ひとりの力でなし遂げることは出来ませんでした。サリヴァン先生の天才と、不撓不屈の忍耐と、獻身的な努力とがなかつたならば、人並の話し方に於て、現在私が達し得たほどの進歩は到底望まれなことでありました。それからまた、各音を明瞭に發音し、總べての音を千種萬態に組合はせるための努力に對しては、絶えずサリヴァン先生のお助をかりなければなりませんでした。なぜなら、今日ですらなほ、先生は毎日のやうに私の發音の

誤を一々訂正して下さい下さつてゐるほどですから。

聾啞者の教育に經驗のある人ならば、それがどんなものであるかを知つてゐます。そしてその人達だけが、私が闘はねばならなかつた特殊な困難を理解することが出来ませう。私には先生の唇を讀むために、自分の指のほか頼るものがなく、また喉の振動、口の運動及び顔の表情を捕へるためには、觸覺に訴へるよりほか道がありませんでした。けれども、この感覺は屢、正確でないことがありました。そのやうな場合、私は言葉や文章を幾度となく繰返さねばなりませんでした。時には幾時間も繰返しくして、始めて自分の聲の正



しい響を感ずることが出来たこともあります。私の仕事は練習、練習、また練習でありました。失望と倦怠とが屢、私をがっかりさせましたが、併し、また今に自由になつて、愛する人々に私の成功を見て頂くことが出来るのだと思ひ直しては、我と我が心に鞭打ちながら、その成功の暁、彼等の悦は如何ばかりかと、想像するのでした。「もう、妹には私の言葉がわかるだらう」といふ思は、あらゆる障礙より強いものでありました。そして私は屢、もう啞ではないのだと有頂天の悦を以て獨り言をいふのでした。お母様に話しかけて、その唇から答を読むときの悦を想像してみると、氣落ちしては

みられませんでした。

さて愈、ものいふ力を自分のものにすることが出来た時、私は矢も楯もたまらぬほど家に歸りたくなりました。あらゆる幸福の中で、一番大きな幸福の瞬間がやつて來たのです。私は家に歸る旅行の途中、ひつきりなしにサリヴァン先生にしゃべりつゞけました。話したいことがあるからではなくて、最後の瞬間まで少しでも上手になりたいと思つたからです。殆ど知らぬ間に、汽車はタスカンビヤの停車場に著いてゐました。プラットフォームには家中の者が一人残らず立つてゐました。私の口から出る一綴々々に頷きつ

タスカンビヤ  
アメリカ合衆  
國アラバマ州  
コルベルトの  
首府  
ケラーの生地



つ、悦のあまりに言葉もなくて、たゞひしと私を抱きしめて下さつたお母様の様子、妹のミルドレッドが私のもう一方の手を掴んで躍り上つた様子、お父様はお父様で男らしい沈黙のうちに、誇と愛情とを示して居られた様子、あゝかうした光景を思ひ浮かべるとき、今もなほ私の两眼には熱い涙が溢れるのです。

山と丘は汝の前に聲をはなちて歌ひ、

野のもろくの木は手を拍ちて喜ばん。

本當に私はこのイザヤの預言が、私のうちに實現したのではないかと思つたほどでした。

(レンケラー全集第一卷)

山と丘は云々  
舊約聖書イザ  
ヤ書五十五章  
十二節に見え  
る語

一五 屋根

志賀直哉

志賀直哉  
小説家  
明治十六年生

四つか五つか忘れた。が、ともかく秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、手洗場の屋根へ懸けすててあつた梯子から、誰にも氣づかれずに、一人母屋の屋根へ登つて行つたことがある。棟傳ひに鬼瓦の所まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を歌つてゐた。私としては、こんな高い所へ登つたのは始めてだつた。

ふだん下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足



の下にある。西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる。間もなく私は、

「謙作。——謙作」と、下で母の呼んでゐるのに気がついた。それは氣味の悪いほど優しい調子だつた。

「あのね、其處にじつとしてゐるのよ。動くのぢやありませんよ。今山本が行きますからね。其處におとなしくしてゐるのよ。」

母の眼は少し釣り上つて見えた。ひどく優しいだけ、徒事たごでない事が知れた。私は山本の来るまでに降りてしまはうと思つた。そして馬乗りのまゝ、少し後しざりをした。

「あゝつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作はおとなしいこと。お母さんのいふ事をよくきくのね。」

私は、じつと眼を離さずにある、變に鋭い母の視線に縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく、書生と車夫との手で、私は用心深くおろされた。私は母から烈しく打たれた。母は興奮から泣きだした。

母に死なれてから、此の記憶は急にはつきりして來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。

(暗夜行路)



野口英世  
幼名清作

醫學博士

理学博士

ドクトル・オ  
ヴ・サイエン

ス

ロックフェラ

1 醫學研究所

正員

帝國學士院會  
員

母

昭和三年歿  
年五十三

野口シカ

大正七年歿  
年六十六

### 一六 少年時代の野口英世

貧しい中にも強い母の愛に包まれて、清作は健かに生ひ立つた。しかし、清作が同じ年頃の子供等と無心に遊ぶ様を見る度に、あゝ、あの手をどうしようと、母の心は暗くなつた。

清作も成長するに随つて、自分の不具を覺つた。何をするにも右手しか使へないことが、幼心にも悲しく恥づかしかつた。そして、自然その手を著物の間や帶の下に隠さうと氣を配るやうになつた。が、心無い遊仲間、清作が隠さうとすればする程、無理にもその手

首を見つけ出して嘲弄の種にした。清作は平素は溫和な氣質であつたが、悪童共にからかはれる時は、さすがに堪へ切れなくなつて、奮然として子供等に飛びつ



野口英世

き、胸ぐらを取り、喉首を締めようとするこゝとさへあつた。それでその場はをさまつても、後では悪童共のからかひが一層激しく

なるばかりであつた。

それを見る度に、母は人知れず涙を流した。そして、百姓の子で百姓の仕事さへ出来ぬ我が子のために、身



三和小學校  
福島縣耶麻郡  
翁島村に在つ  
た

磐梯山  
同郡内、猪苗  
代湖の北に在  
る火山  
海拔一八一九  
米

を粉に碎いても、學資を作つて學問を仕込んでやらねばならぬと堅く決心した。

清作は八歳の春、村の三み和小學校に入學した。清作は好きな勉強をすることは喜んだが、こゝでも心ない級友等が、運動時間などにその不自由な手を嘲り辱しめるので、次第に學校に行くのをいとふやうになつた。そして、朝、學校へ行く風をして家を出て、遙か磐梯山の麓邊まで行つて時を過し、夕方になると、手や顔に墨を塗つて家に歸ることも度々であつた。然るに、母は終日我が子のために働いて、毎晩遅く、疲れ果てて歸るのである。清作はその姿を見て、せめて筆墨料だけでも

自分の手で儲けて、母の手助をしようと思ひ立つた。そこで、彼は夕方、田の間を流れる小川に柳で編んだうづぼをかけて置いて、翌朝未明にそれを引上げ、その中に入つてゐる泥鰯をとつて、入用のありさうな家を尋ねて賣り歩いた。

母は清作の様子に心を痛め、或夜、清作を呼び、「お前は學問をして身を立てねばならぬ。そのためにわたしは辛い働もしてゐるのだ。泥鰯賣をする暇に、なぜ勉強して偉い人になつてくれぬ」と涙ながらに言ひ聞かせた。「よしつ、勉強して偉い人にならう」と、彼本來の負けじ魂が目を覺した。以後、清作は一日も學校を休ま



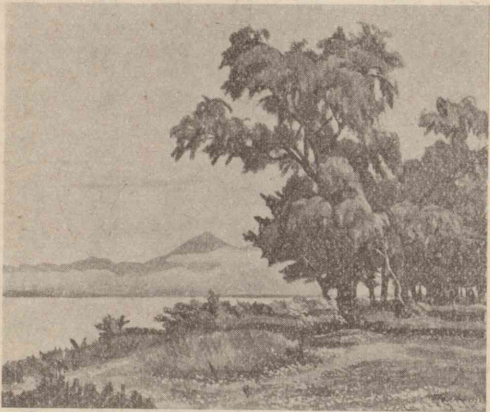
ずに、友達の嘲笑も風と聞き流して、一心不亂に學業を勵んだ。

清作の努力は學校の成績の上にもめきくと現れ、中等科五級の時には級長に拔擢せられ、更に尋常四年の時には、全校を通じての生長として、手不足な教師を手傳つて生徒を教へることになつた。そして、尋常科卒業の際は、成績拔群のため、特に縣廳から褒狀を授けられた。母の喜はいひやうもなかつた。

清作は尋常小學校卒業の際、試験委員として出張した猪苗代高等小學校の首席訓導小林榮氏に見出され、同氏の懇な慫慂と助力によつて、猪苗代高等小學校

猪苗代高等小學校  
福島縣耶麻郡  
猪苗代町に在  
つた  
小林榮  
教育家  
猪苗代日新館  
の創設者  
萬延元年（二  
五二〇）生

に入學することになつた。時に年十四、明治二十二年四月のことであつた。



（筆亭柏井石）湖代苗猪と山梯磐

當時この地方では、尋常小學校を満足に卒業する者さへ少い位で、高等小學校に入學するのは裕福な家庭の子女に限られてゐた。随つて、極貧の清作が高等小學校に入學したといふことは、村の人々にとつては驚倒に値する事實であつた。

三城潟の清作の自宅から猪苗代町までは、往復三里

三城潟  
翁島村大字三  
ッ和字三城潟  
猪苗代湖の北  
岸に在る



猪苗代湖  
福島縣の中部  
に在る

の道程である。殊に冬になると、強い磐梯山嵐の吹雪に捲きこまれたり、猪苗代湖から吹いて来る烈風に吹き飛ばされたりすることも珍しくはない。が、清作は、幼少から窮境に處して鍛へられて来た忍耐力と、天性の負けじ魂とを以て、雨の日も風の日も一日も缺席せずに通ひぬいた。

しかも、貧窮は、彼に通學以外の餘暇をその好きな勉學のために費すことを許さなかつた。母思ひの清作は、この頃となつては、如何にしても母の辛苦をよそに見てゐることが出来なくなつた。そして、不自由な手にもなし得られるだけ、農耕の手助や行商の品の手入

をしようとした。又、時には幼い弟の守をしたり、冬籠りの用意のため、山へ柴刈りに行つたりした。

その頃、小學校に於て最も生徒を苦しめたのは漢文であつたが、既に獨習で日本外史を通讀し、更に十八史略を讀んでゐた清作にとつては、むしろ易々たるものであつた。又、英語はナショナル第三リーダーまでをもつてこの學校の全課程としてゐたが、彼は既にその第四リーダーを讀破してゐたのみか、博物學の原書等をも繙いてゐた程で、語學には異數の上達を示してゐた。

しかし、彼の最も好む所は理科で、物理・化學などの參

日本外史  
二十二卷  
源平二氏から  
徳川氏に至る  
武家時代史  
頼山陽著  
文政十二年  
(二四八九)刊  
十八史略  
二卷又は七卷  
史記以下宋史  
に至る十八史  
の事實を摘録  
した史書  
元の曾先之撰  
ナショナルリー  
ダー  
アメリカのパ  
インズ會社出  
版の初等英語  
讀本



考書を涉獵して熱心に勉強してゐたので、教場内では、他の生徒のやうに筆記をすることなく、只一語も聞きもらすまいと熱心に傾聴してゐるのみであつた。

この外に、彼の得意としてゐた學科は作文であつた。彼は暇ある毎に少年雜誌などを讀んで、想を纏め、文を練ることに努めてゐたので、作文に於ても彼に匹敵する者は級中に一人もなかつた。

かく、生來の負けじ魂と非凡の精力とによつて、彼の學業は驚くべき進歩を示したが、如何ともしがたいのは、左手の不具であつた。人となつて以來十數年、これあるがために、彼はいひがたい不便を忍び、耐へがたい

恨を吞んで來たのである。どうかして物を握れるやうになりたいといふ切なる思は、時として、いつそ小刀で指を一本々々切り離さうかと思ふまで彼を苛だたせた。

高等四年の第二學期半ばの、或作文の時間のことであつた。彼は日頃胸に餘つてゐた悲痛な心情を綴つて提出した。擔任の小林訓導が、このいたましい少年の告白を讀んだ時、同情の涙が漕々として紙面を打つた。つゞいてこれを讀んだ職員は、一樣に同情の念に動かされて、衆議は忽ち清作の左手に手術を加へてやらうといふ問題にまで進んだ。この文は更に模範文



若松市  
福島縣若松市  
渡部鼎  
醫師  
陸軍二等軍醫  
正  
衆議院議員  
昭和七年歿  
年七十五

として同級生に示されたが、文中に流れてゐる限りな  
い悲痛の情は同級生をも動かし、彼等は小林訓導の發  
議に應じて、進んで贖金を申し出た。訓導は、職員生徒  
の同情の結晶たる十圓餘の金を以て、その頃米國から  
歸朝して若松市に開業してゐた開腹術の名醫、會陽醫  
院長渡部鼎氏の手術を受けさせた。その結果、清作の  
不具な左手も、僅かながら物を握る自由を得た。しか  
し、これが人類の恩人野口英世を世に送る一大機縁に  
ならうとは、何人が思ひ設けたであらうか。  
彼は、師友の温かい同情に感泣すると共に、今更の如  
く醫術の尊さが肝に銘じて、將來自ら醫者として立ち

たいといふ一念が炎の如く燃え上つて來た。そして  
高等小學校を卒業するや、渡部ドクトルに懇願して、書  
生として住みこませて貰ふことになつた。

清作は、醫院の用務の合間々々に、脇目もふらずに醫  
術前期試験の諸學科を勉強し始めた。そして、生來の  
強い氣根と、小學校時代から口癖となつてゐる三時間  
睡眠主義とをもつて、日夜を分かつたに勵んだ。院長  
が夜中の一時、二時頃、何かの序でにその室を覗いて見  
ると、彼がランプの光の下に、一心に醫書を読んでゐる  
ことは珍しくなかつた。

清作が會陽醫院に入つた翌年、日清の國交が斷絶し

翌年  
明治二十七年



て、院長は軍醫として召集された。院長は出征に先立ち、多くの門下生や書生に暇を出したが、年少且新參の清作を抜擢して、留守中の醫院一切の用務から、一家の會計まで之に委任した。

院長の留守中、患者の治療はしなかつたので、勉學の暇は十分あつた。清作はこの間に、醫學の研究はいふまでもなく、普通學の素養をも豊富にした。特に獨佛語の進歩は著しく、醫書は殆ど皆原書で讀んでゐた。

しかし、院長留守中の家事一切を處理するといふ委託任務は、まだ人情に疎い少年清作には重荷に過ぎて、その心勞は一通りではなかつた。家人の間に不和が

千里小學校  
耶麻郡千里村  
に在つた

あつて、清作のなすことすべてが一部の人々からは惡意に解され、壓迫は日毎に募つた。清作は舊師小林校長——小林氏は當時千里小學校長になつてゐた——にその旨を認めて、辭職のことを相談したが、校長からは直ちにそれを不可とする旨の返事が來た。けれども、清作の身邊には、益、露骨に排斥の手が加へられつゝある。清作は、更に再三書を寄せて、窮狀を恩師に訴へた。校長も彼の立場には内心同情を禁じ得なかつたものの、しかし一旦の過失は永久に消え難いものであることを思つて、嚴然として次のやうな意味の訓戒の手紙を寄せた。



數ある書生の中から、若齡の君に後事を託された院長の厚い信任に對しても、君はあくまでこの重任を果さねばならぬ。まして、院長は國家のために、一身を捧げて出征されてゐる。何の緣故もない者でも、出征軍人に對しては、後顧の憂のないやうにするのが、國民としての義務ではないか。先生が凱旋されるまで、一意、恩師御一家のために盡くせ。それはやがて自己を大ならしむる修養でもある。唯々誠意を以て勤めよ。

この手紙を手にした清作は、夢の醒めたやうに己の薄志を愧ぢ、以後あらゆる不快を忍んで、委託された使

命を果すために、自己の眞なり善なりと信ずる所を斷行した。

院長は、二年に亙る出征を終へて、明治二十九年の春若松に凱旋した。清作は託されてゐた留守中の家事一切をありのままに報告し、留守中克明に記帳して置いた。戦役中會計明細表を提出して査閲を乞うた。この明細表には、米屋八百屋の拂から、十五錢の草履、二錢の切手に至るまで、細大漏らさず英文で記載されてゐた。院長は、今更ながら、清作が一些事をも忽にしない努力に感歎を禁じ得なかつた。

清作は、十八歳の初夏渡部氏の門に入つてから既に



四箇年、その間精根を盡くしてあらゆる學科の修得に勵んで來たが、就中醫學に於ては、已に醫術開業前期試験を受けるに十分な自信を持つやうになつてゐた。この上は一日も早く東京に出て斯學の蘊奥を極めたといふ念慮を抑へることが出來ず、小林校長に宛て意中を残りなく認めて、東都遊學可否の意見を求めると、何事にも輕擧を厭ふ校長から、今は進んで遊學を贊成して來た。

清作は早速院長に東都遊學を願ひ出た。院長も快くこれを承諾して、種々將來を訓戒し、手厚い餞別を贈つてその門出を祝した。清作は受験準備の書類を背

越後街道  
福島縣安達郡  
本宮町から若  
松市を経て新  
潟市に至る街  
道

磐越西線  
東北本線と信  
越本線とを結  
ぶ郡山・新津  
兩驛間の鐵道  
東北本線  
上野・青森兩  
驛間の鐵道  
本宮驛  
東北本線二本  
松・日和田兩  
驛の間に在る

にし、希望にみちて、越後街道を東へ、六里に近い山道を、四年振りに我が家へと急いだ。

翌日、清作は知己朋友に別れ、母と共に猪苗代の小林校長の宅へ別れを告げに行つた。清作の門出を祝ふ楽しい晚餐を終つてから、小林校長夫妻と清作母子とは、往時の追憶や清作の將來について、夜の更けるまで語り合つた。校長は十二圓の月俸から十圓を割いて餞別とした。

その頃はまだ磐越西線が開通してゐなかつたので、上京するには、東北本線の本宮驛まで、九里の山坂道を歩かねばならなかつた。翌朝、ほの暗い上り框に清作



は草鞋の紐を結んで、恩師と慈母とに送られ、花稻の香の  
 の高い暖道の朝露を踏みつゝ、町外れまで来た。湖面  
 は今や未來の世界的大學者の前途を祝ふものの如く  
 朝日に輝き始めてゐる。清作は、幼い子を訓すやうに  
 何くれとなく上京後の注意を與へる恩師と、名残を惜  
 しんで一町、半町とついて來る慈母とに悲痛な別れを  
 告げ、遠い前途を望みつゝ、初秋の碧空にそゝり立つ濃  
 紫色の磐梯山を後にした。

(奥村鶴吉編、野口英世)

奥村鶴吉  
 醫師  
 醫學博士  
 ドクトル・オ  
 ウ・サイエン  
 ス  
 東京齒科醫學  
 專門學校教授  
 明治十四年生

一七二の一躍

人見絹枝

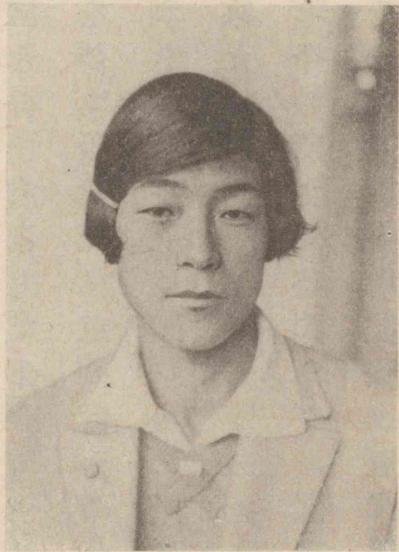
豫選と二十分間をわいて決勝が始つた。私は此の  
 二十分を利用して、十分マッサージをして貰つて、決勝  
 を待ち受けた。三回ばかり歩測をやり直して、今度は  
 利き足が正しく踏切板の上に行くと思ふことが出  
 來た。

今の所では英國のガン選手に負けてゐるとはいへ、  
 そのガン選手の記録は五米四三だ。これならまだま  
 だ壓迫されてゐるといふ程ではない。第四回、第五回、  
 この二回の試技を利用して出来るだけ跳んでみよう。

人見絹枝  
 運動家  
 大阪毎日新聞  
 社員  
 昭和六年歿  
 年二十五



どんな事があつても、立派にガン嬢を破つてみせる。私はこの覺悟と元氣とを以て、第四回目を試みた。



八見絹校

第四回、それは全く私を不安のどん底に沈ませた。今度こそはと思つて、ありつたけの力を出して行つたその一躍！ やはり、私の踏切脚は合はない。記録は五米一八。ガン選手はこれに比して益、脂が乗つて來て、其のレコードを五米四四まで引上げた。英國のマネージャーの喜、同

國選手の喜、私は羨ましくこれを眺めた。チェコスロヴァキヤのスメローパー選手も亦、五米二八の進境を見せて迫つて來た。私の心は一層暗くなつて行く。この時まで落著いてゐた私の心は、急にいらだつて來た。何といふ情ないことだらう。

後に残つた第五回！ 今度こそ跳ばねば、又今日もあのスタンドの優勝マストに英國の國旗が繖るのだ。第六回目もあるが、それには殆ど力が盡きて、十分に脂が乗らないのが普通である。

第五回には、更に二回の歩測をやり直した後、私の持つ總べての力を集注して一躍を試みたのであつた。



しかし、その成績は、甚だ思はしくなかつた。みじめとか悲惨とか言つても、言ひ足りないものであつた。

踏切脚は更に合はない。しかも、その時には、左脚が踏切板に纔か掛つたばかりであつた。身體に十分バネのつかぬ上に心にあせりを覺えた爲、空中で行ふべき挟み跳に無理が出来て、平常の通り著陸前脚を前方に伸ばすと同時に兩手を上方に引上げようとしたその時、鏢のかゝつた鋭い靴のスパイクで、右手の掌を六箇所も深く引裂いてしまつた。

記録は五米三一。審判員の持つ巻尺のメートルの度盛をじつと見つめた時、私は殆ど希望も力も失つて

しまつた。

脱ぎすてたオーバーシューズを著て、その下に傷ついた手を隠しながら、黒田マネージャーの側に戻つて來た。

瑞典のプラチーノ選手は、見事五米一六のレコードを示す。しかし、七萬近い觀衆は一寸拍手を送つたばかりで、又直ぐ元の静けさに歸つた。何のどよめきもなく、場内の空氣はいやな程落著いてゐる。今にも一大變事でも起るか之感をもたせる。

槍投も決勝に進んでゐる。鐵彈擲の決勝はもう終つたらしい。七萬の觀衆は、槍投の結果にも、鐵彈擲の

黒田マネージャー  
黒田乙吉  
大阪毎日新聞  
社員  
明治二十一年  
生



勝負にも目もくれず、たゞあと一回残されたガン選手と私との決戦を待つてゐる。

英國勝つか、又日本のこの私が勝を取るか、鳴りを静めて其の結果を待つてゐるのであつた。フィールドにゐる役員以外の豫選に落ちた選手も、決勝に失脚せんとしてゐる選手も、日・英兩方の身方に別れてしまつた。何時も仲よくしてくれた瑞典の選手を始め、チェコスロヴァキヤ・リトワニヤ・ポーランド・ベルギーの各國選手が、マネージャーと私を取圍んで色々慰めてくれる。ガン選手の方にはフランスの選手が行つて、しきりにマッサージを行つてゐる。「人見さん！ しつ

かりやれ。あとまだ一回ある」と言つて下さる黒田マネージャーの顔！ それはもう常人とは思はれぬ程蒼くなつて、その唇は痙攣してゐる。

後に残つたのは本當に一回きり！ 此の一躍で今日の試合がきまるのだ。どのやうな事があつても、この一躍に成功しなければならぬ。どうか、今日はたつた一度……一度だけでよい、日章旗を揚げることを叶へて貰へないであらうか。あゝ、今日こそ日章旗を揚げたい……。もし、この不成績を故國にゐる父母達が見たならば、どんなに悲しむであらう。郷里からも「お前が家を出てからといふものは、母と姉はお前の勝



利を一日に二度氏神様に詣でて祈つてゐる。國の爲だからしつかりやつてくれといふ意味の手紙が幾通も届いてゐる。「走幅跳できつと勝て」と言つて下さつた方々にも何と言つて詫びられよう。私はこの氣持を、七萬の觀衆や、百六十名近い各國の選手には勿論、黒田マネージャ―にさへも話すことが出來ず、一人で苦しんでゐた。

いよゝゝ最後だ。跳べるだけ跳んでみよう。覺悟はして立つたが、併し私には自信も希望も總べて絶たれてしまつた後であつた。

かうして最後に助走路のスタートに立つた時、私は

七月八日  
大正十五年七  
月八日

木下博士  
木下東作  
醫師  
醫學博士  
大阪毎日新聞  
社客員  
當時同新聞社  
運動部長  
明治十一年生

ふと思ひ出した。それは、七月八日午後八時、大阪驛で漸く暮れたばかりのフォームのベルのけたゝましい音を後にして、汽車が動き出さうとした時、木下博士が「人見さん。僕はあなたに何か餞別をあげたいが何もあげるものはない。たゞ此のユニフォームとパンツを身につけて奮闘してくれ。あなたの苦しむ時はきつと私も案じてゐると思つてくれ。それから、向かふに行けば、誰にも、黒田氏にさへ話すことが出來ず、泣くにも泣かれない時があるだらう。その時はあなたは目を閉ぢて日本の神様を拜むのだ。きつとさうするのだよ。元氣で行つて來なさい」と言つて下さつた御



言葉である。私は靜かに目を閉ぢて「どうか一度です。跳ばして下さい」と夢中に祈つた時、今までこらへてゐた涙が急に兩頬を傳はつた。拭つてもくゞ涙は絶えない。側にゐるガン選手に對して恥づかしいほどこぼれる。

助走の三十米餘の地面がぼんやりかすむ。

夢中で走り出した、その最後の一躍！　今まで合はなかつた其の脚も八寸の踏切板に一分一厘の違ひもなく右足が強くあたつた。占めたつ！　跳べた。始めて跳べた。記録五米五〇。私は直ぐに大聲を出して喜びたかつた。しかし、よく考へれば私の後にはま

だガン嬢の一躍がある。

ガン嬢はしきりに深呼吸をしてゐる。そして、走り出した其の時、私は其の助走の有様も何も見ない。ただ八寸の踏切板を見つめてゐた。今も私の眼に明らかに残るそのガン選手の左脚！　踏切板の前五分ばかりファウルになつた。

アナウンサーの聲も朗かに決勝が報告された。その聲の終るか終らぬ内に今まで靜まり返つてゐたスタンドの觀衆は一齊に總立ちになつて、そのスタンドを靴でたゞく音、われるやうな拍手。「ハロー人見、ハロー人見」の聲を浴びせられながら、高々と日章旗はスタ



ンドの中空高く、君が代」の吹奏裡に掲揚された。  
 これを仰いだ黒田マネージャーと私はフィールド  
 の中で泣けるだけ泣いた。多くの白人の中に置かれ  
 たたつた二人の日本人は、日章旗の下で唯泣いた。そ  
 して、この時ほど天皇陛下の赤子の一人であることを  
 深く感じたことはなかつた。

(スパイクの跡)

北原白秋  
 名は隆吉  
 詩人 歌人

明治十八年生  
 良寛禪師  
 俗名山本文孝  
 禪僧  
 歌人  
 越後國(新潟  
 縣)の人  
 天保二年(二  
 四九一)歿  
 年七十四

一八 良寛さま

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。かういふ  
 お話がある。

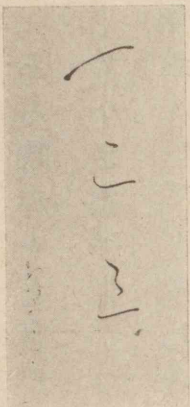
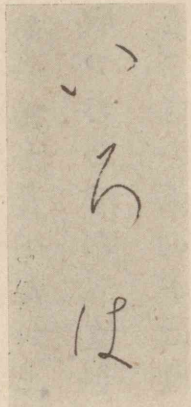
ある時、良寛さまはいつもの通り、子供たちとかくれ  
 んぼをしてをられた。鬼になつた良寛さまが目を瞑  
 つて、「もういゝよ」といふかはいゝ聲を一心に待ち受け  
 てをられる。とちやうど日の暮れ時で、子供心の何が  
 な欲しくなる時である。家々の燈がちら／＼ 點き出  
 すと、子供たちは急に遊をやめて、一人のこらずこそこ



そと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛さまも何もうつちやらかしてである。むろん、いくら待つても「もういゝよ」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして、たうとう夜が明けてしまつた。良寛さまはそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてをられた。

それから、またある時のことである。良寛さまが今度にかくれることになつた。そこで見つけられては大變だといふので、さつそく田圃の稻叢の中にもぐり

込んで、それはくく小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おどくくして



良寛筆蹟

をられた。すると子供たちは、またいつもの通り、一人のこらずこそくくと歸つてしまつたのである。それを良寛さまは少しも御存じない。また日が暮れて夜が來て、ま

た夜が明けた。稻叢には霜がまつしろに置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稲束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛さまが



小さくなつてもぐつてをられる。「おや、良寛さまが」といふと、慌てて、「そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

ある時、赤々と實が熟れて、鈴なりになつた柿の木の  
下で、小さな子供がひとり泣いてゐた。良寛さまが通りかゝつて、「どうしたんだ」と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べたい」といふ。「よし、それでわしが取つてあげる。泣くのではないぞ」といひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしい

のなんの、良寛さまは夢中になつて、齧るはく、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやくと食べほれてゐる。下にある子供こそあはれである。それを見て火のやうに泣き叫ぶとはじめて良寛さまは氣がついた。さあ、しまつた、これは！といふので、慌てて枝をゆさぶつた。

(洗心雑話)



島木赤彦  
本名久保田俊彦  
歌人  
大正十五年歿  
年五十一

一九 かるさんと米

島木赤彦

先年、私の歌の友人が山形縣から上京した。子供の時から山形の山中に百姓生活をしてゐて、近縣へもおそらく出たことがないのに、急に東京へ出るといふのであるから、かなり億劫な思をして、やつと決心したらしい。

友人はそのために縞のかるさんを新調した。耕作・木樵用のかるさんは紺無地であるが、改つた他出用には縞のをはく。それも上京のためにわざ／＼新調したのであるから、友人のためには容易ならぬかるさん

奥羽線  
福島・青森兩  
驛間の鐵道  
上野驛  
東京市下谷區  
に在る  
東北本線の起  
點

私の宅  
同市麴町區下  
六番町に在つ  
た

である。友人はそのかるさんをはいて、奥羽線の一山驛から汽車に乗りこんで、あく朝上野驛に著いた。汽車の中でもかるさん著用の客は珍しい。まして東京の停車場や市中にかるさんを見出すことはおそろしく絶無であらう。随つて、友人は汽車に乗りこんで以來、衆人注視の的となつたのであらうけれども、彼はその注視を氣づくほど敏感な近代人ではなかつた。上野驛に著いて、いよ／＼東京の土を踏んでも、相變らず山形縣山中の農人であつた。

この農人は東京の市内電車に乗つて麴町にある私の宅まで來る順序を知らなかつた。いきなり目の前



に留つた電車に飛び乗つた。車掌が停留所ごとに町の名を呼ぶけれども、彼にはすべて縁のない名前である。そのうちに「S町」と呼ぶ車掌の聲が聞えた。彼はそれを聞くと直ぐ電車から飛び下りた。そして通行の人に、この邊にN書店といふ本屋があるかと聞いた。N書店は停留所のすぐ近くにあつた。彼は國にゐるとき、私どもと一緒に發行する歌の雑誌の奥附に、發賣所N書店と印刷されてあることを知つてゐた。そして雑誌について同書店の一方ならぬ御厄介になつてゐることを聞いてゐた。彼は車掌の呼ぶ「S町」の聲で直ぐN書店を想ひ起すとともに、日頃御厄介になつて

ゐる自分等の雑誌のため、感謝の意を表せずにはゐられなかつたのである。

かるさん姿は間もなくN書店の店頭に現れ、ついで主人の前に案内された。主人も目の前の農人姿には少からず驚異の目をみはつたらしい。何者であるかがわからなかつたのである。彼はそんなことには構はず、山形辯を以てずん／＼自分の來意を告げた。自分は山形縣山中のものであるが、自分等の雑誌について非常に厚意を蒙つてゐることを聞いて、久しく感謝の意を持つてゐたが、今度始めて上京して、たま／＼電車の中で「S町」の名を聞き、急ぎ飛び下りてお禮を述べ



に來たのだといふのである。主人は非常に喜んで、直ぐに使を以て、今山形からこれ／＼の人が訪ねて來た、是非晝餐を共にしたいと申し越されたので、私も直ぐ出かけて、同書店の二階で始めて對面した。

この友人は、それから私の宅に數日滞在した。菓子を出す、その菓子を掌の上に置いて、これは何錢ばかりの菓子かと聞く。いかにも物體ないといふ様子である。食べる時は一旦額の邊まで上げて頂いてから食べる。話をしながら時々羽織を氣にして手で撫でる。聞けば國許出立の時、父上から借りて著てきたのださうである。

歌仲間の一人であるH畫伯が晚餐を共にしようとしてやつて來られた。その時畫伯が紙を展べて、その友人の肖像を畫がかうとした。友人はいかにも恥づかしさうにして坐つてゐた。畫がきをへて、それを友人に贈るといはれても、なほ恥づかしさうにしてゐる。菓子さへ頭上に頂いて食べるこの友人が、畫に對して感謝の詞を述べない。あとで、この肖像畫の非常に貴重であることを話すと大いに驚いた。そして明日お禮をいひに連れていつてくれといふのである。

この友人は私ども歌仲間にあつて優秀な作者である。その優秀な作歌は、この素樸と眞情とからいつも



生まれ出るのであらう。

信濃  
長野縣

雜司ヶ谷龜原  
舊東京府北豐  
島郡高田町雜  
司ヶ谷龜原  
現東京市豐島  
區雜司ヶ谷町  
一丁目  
飯田町停車場  
舊飯田町驛  
中央線の舊起  
點で麴町區飯  
田町に在つた

今一人の友人は、信濃の山中に住んで、同じく農人である。その友人の上京した時、白米一斗を土産として背負つて來た。「重かつたらう」といへば、「汽車の中は只だから、重いことはない」といふ。「電車に乗るに困つたらう」といへば、「米を背負つて乗らうとしたら、車掌が面倒いふから歩いて來た」といふ。私はそのころ雜司ヶ谷龜原に住んでゐた。飯田町停車場から私の宅までは一里ある。それを背負つて來て平氣である。「偉大な土産をくれたね」といへば、「東京は米が高いといふか

ら持つて來たのだ」といふ。

この友人は、私の貧しきを憐み、はる／＼信州より來り、贈るに米一斗を以てしたのである。誠に忝いが、この米は甚だ玄くろくてまづい。厚意を感謝して、他の米に少しづつ混ぜて頂くことにした。

この友人の歌も甚だ優秀である。彼の優秀な歌は、米一斗を信濃山中から東京まで背負つて來る根氣と眞情とから生まれ出るのである。  
(赤彦全集第六卷)



山本有三  
 名は勇造  
 劇作家 小説家  
 明治二十年生

二〇 一粒の米

山本有三

小さい一粒の米に字を一字書く。それだけでも、どうしてどうして、容易のことではありません。ところが世間には、十字も二十字も、いや、何百といふたくさんの文字を、一粒の米の上に書く人があります。いつか、一粒の米にお經の文句を書いたといふ記事が新聞に出てみました。が、新聞もそれを大げさに報道するし、読者も驚歎してそれを迎へます。たいしたものだ、すばらしいものだ、一粒の米に、千何百字書いてあるさうだなどといひます。

それは確かにすばらしい事です。あんな小さな米粒に千何百字書くなどといふことは、人間わざではないやうな気がします。しかし、よく見ると、あの米の中には、一粒、一粒に、千はおろか、何萬、何億、何兆といふ文字が書いてあるのです。不思議なことに、それは新聞も書きたてないし、みなさんも気がつかないでゐるやうです。けれども、百字書く、千字書くといふことが、新聞にのせるほどすばらしい事ならば、何萬、何億、何兆といふ文字が書いてある方がもつとすばらしいことではないでせうか。

すると、みなさんはいふか、もしれません。新聞に出



た記事は人間がほんたうに書いたもので、今いつてゐるのはほんたうに人間が書いたのではない。たとへ話だらう。たとへ話なんか駄目だとかういふにちがひありません。ところが、これは決してたとへ話ではありません。ほんたうに人間が血と汗で書いたものです。

みなさんは米粒を見たことがありますか。毎日、毎日、けふの御飯はかたいの、やはらかいの、うまいの、まづいのと、勝手なことをいつて食べてゐますが、一粒の米をほんたうに見たことはないでせう。一度手の平にのせてよく見て、ごらんなさい。一粒の米の上には

何億、何兆といふ、それはく血のにじむやうな文字がいつぱいに書いてあります。もし、それが見えない人は目があいてゐてもあきめくらといふものです。

よく考へてごらんなさい。たつた一粒の米でも、それが出来るまでには一年かゝります。その一年の間お米を作る人はどれだけの辛苦をすることか。どれだけの人手がかゝつてゐることか。いちがいに人手といひますが、お百姓さんはたゞ手を動かしてゐるだけではありません。たがやしたり、植ゑたりするには鋤や鍬がいります。その鋤や鍬は誰がこしらへるのですか。さういふふうにか考へてゆくと、米がみのるま



ではお百姓さんだけの力ではない、鋤や鍬や、その外  
 さまざまの道具をこしらへた人々の骨折も當然はい  
 つてゐるわけです。いや、それだけではありません。  
 その鋤や鍬の材料になつてゐる鐵や木はどこから、誰  
 が取つて來たのか。もつと大事なことは、その米のみ  
 のる大地との關係はどうなのか。日光はどうだ。雨  
 はどうだ。さういふ工合に一つ／＼考へてゆくと、た  
 つた一粒の米ですが、その一粒の米の中には、何千何萬  
 といふ人の勞力がこもつてゐるわけです。いや、人間  
 ばかりではありません。天地につながりをもつてゐ  
 るのです。

一粒の米が私たちの口にはいる。それは何萬とい  
 ふ人の骨折が私たちの口にはいることです。いや、無  
 窮の天地がはいることです。それが私たちの血とな  
 り、肉となつて、私たちを養つてくれてゐるのです。私  
 たちが息をしてゐる限り、私たちの心臓が鼓動してゐ  
 る限り、見知らぬ人の血と汗とが、どれだけ私たちの身  
 體の中で働いてくれてゐることとせう。天と地とが  
 どれだけ活動してくれてゐることとせう。

一粒米の重きこと須彌山の如し。

昔の人でかういふことをいつてゐる人があります  
 が、みなさんも是非一度米を手の平にのせて見て下さ

須彌山  
 佛説で此の世  
 界の中心に在  
 るといふ大山  
 高さ八萬四千  
 由旬といふ



い。米櫃からわざ／＼出して來なくつてもようござ  
 います。食事の時茶碗からこぼれた御飯でもようご  
 ざいます。その一粒の御飯を手の平の上にのせて、じ  
 いつとその重さをはかつてごらん下さい。その重さ  
 が分かれれば、ひとりでに米粒の上に書いてある無数の  
 文字も讀めるでせう。

(日本少國民文庫「心に太陽を持つて」)

二 用水

松平伊豆守信綱  
 徳川家光の重臣  
 武藏國(埼玉縣)川越藩主  
 寛文二年(二  
 三二二)歿  
 年六十七  
 安松金右衛門  
 名は吉實  
 算術の達人  
 野火止  
 現埼玉縣北足  
 立郡大和田町  
 野火止  
 多摩川  
 現山梨縣東山  
 梨郡に發源し  
 東京府を流れ  
 て東京灣に注  
 ぐ  
 新河岸  
 現埼玉縣川越  
 市附近に發源  
 し南流して荒  
 川に入る

松平伊豆守信綱の代官に、安松金右衛門といふあり。  
 豆州の領分野火止といふ所に多摩川の流れを引きた  
 らんには、開發の田地もあるべきやと議せられしに、い  
 かにもよろしかるべき由を申す。およそ黄金三千兩  
 を費すべきにやとありしかば、豆州聞きて、我、此の處を  
 領すとも、又いつかたに移りなんも知れず。我、三千兩  
 の黄金を費して、ながく此の地の利あらんこと、且は公  
 儀への奉公の一つなりとて、安松に命じて多摩川の水  
 を引かんとて、十六里ほど溝洫を穿ちて新河岸といふ



にいたりたり。

かくて水流れ入るかと待つに、更に水来らずして一

年を経たりけり。豆

州、安松を召して、いか

で水は入らざる」とあ

りしに、いかに水は

入るべきにて侍る。

なにさまにも故あり



野火止の水用

と存ず」といふ。「其の故いかに」とありしかど、「いまだ其の由をば心得侍らず」と答へけり。又の年にも水入らず。また安松を召して尋ね問はれしかば、「さりとては

武藏野  
現東京府・埼  
玉縣附近一帯  
の平野  
川越  
市  
現埼玉縣川越

水は入るべきものに候へども、かくのみ侍ることかへすがへす不審に候。但し、此の地は武藏野にて侍れば、およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙などを敷きて、客来ればそれを巻きて、さて請じ侍る。これは、地乾きて、しかも風常にあれば、忽ちに座中塵埃にうづもれ侍るが故なり。然るに、今年は城下の塵埃むかしのやうに侍らず。殊に、武藏野に植ゑ侍りし畑物、今年ほどゆたかに候こと、つひに覚え侍らず。多摩川より此の溝に流れ入る水を、廣き野に引き侍る故に、いまだ流れ来るほどのことは侍らぬにや。此の水廣野にみちみちたらん後、かならず流れ来るべきものと存ず」と



答ふ。羽生又右衛門といふ代官こゝらをつかさどり  
ければ、やがて召し尋ねられしに、されば今年ほど野に  
植ゑしよろづのゆたかなることは覺え侍らず」と申せ  
しかば、豆州又のたまふこともなし。

又の年にも水來らず。此の時も、安松を召して尋ね  
られしかど、去年の如く答へければ、汝が地の高下を審  
かにせざるが故に、水流るゝに堪へざるにや」と怒られ  
けれど、驚く氣色もなし。

三年といふ秋、大雨のありける後、雷の鳴る如く、水音  
おびたゞしくとゞろきて、水此の溝にあふれみち、平地  
をも水行くばかりにて、六七寸ばかりある鮎の流れ來

ることおびたゞしく、たゞ一時に十六里がほどに流れ  
わたり、新河岸の川に流れ入りけり。さるほどに、田地  
もひらけて、野火止二百石の地、忽ち二千石の地となり  
ぬ。

豆州、安松を召して、此の年頃、我、主の徳分に汝を責め  
たりけるに、つひに驚くことなく、重ねて溝を修せんと  
もせざりしこと、神妙に覺ゆるものかなとて、一倍の祿  
賜はりて二百五十石になされたり。其の後次第に經  
上りて、よき職をもつかさどれり。

(遺老物語)

遺老物語  
二十冊(寫本)  
逸事逸話集  
朝倉景衡編  
享保十八年  
(二三九三)成  
る



橋南谿

名は春暉

國學者 醫師

伊勢國(三重

縣)の人

文化二年(二

四六五)歿

年五十三

中江藤樹

名は原

儒者

近江國(滋賀

縣)の人

慶安元年(二

三〇八)歿

年四十一

江州大溝

現滋賀縣高島

郡大溝町

小川村

現同郡青柳村

尾州

王陽明

明代の學者

尾張國

現愛知縣の内

二三 藤樹先生

橋南谿

中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝の在、小川村の一農家に生まる。學は王陽明の流れを汲み、德行一世に高く、遠近その風を望まざるはなかりき。先年、尾州の一士人、用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村にありと聞きて、畑打つ農夫に尋ねしに、畑道なれば知れ申すまじ、案内し奉らん」とて、先に立ちて行く。程なく小さき藁屋に到り、暫し待たせ給へ」とて内に入り、やがて出づるを見れば、木綿の新しき單衣に、布の小紋の羽織を著たり。彼の士人驚きて、さてく

致良知

中江藤樹筆蹟

丁寧なる男かな、墓だに教へ得さすれば満足なるにと  
思ひもて行くうち、墓所に到りぬ。  
彼の農夫竹垣の戸を開き、「いざ入りて  
拜し給へ」といひて、其の身は戶外に拜伏  
せり。士人大いに驚き、さては、衣服を改  
め著せしは我が爲にはあらで、先生を敬  
するにてありけると心づき、「さても汝は  
藤樹先生の御家來筋の者にてやある」と  
問へば、「さには候はず、されど此の村の者  
は、一人として先生の御恩を蒙らざるは  
無し。『親を敬ひ、子を親しむことを辨へ知りたるは先



熊澤蕃山  
名は伯繼  
通稱治郎八

儒者

京都の人

元祿四年（二

三五一）歿

年七十三

加賀

加賀國

現石川縣の内

河原市

現滋賀縣高島

郡新儀村安井

川原市

榎木の宿

現同縣滋賀郡

和邇村の内

生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず」と、我が  
父母も常々教へ候ひぬ」と語る。士人も初はたゞなほ  
ざりに一見の心にて來りしが、此の農夫の様子を見聞  
するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸り  
ぬとなり。

熊澤蕃山は先生の門人なり。此の人藤樹先生に従  
はれし始を尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を  
預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひ、榎木  
の宿に到りて泊る。馬方、河原市へ歸り、馬を洗はんと  
鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げ  
て見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の

取忘れたるにこそと思へば、其のまゝ榎木に走り行き、  
飛脚の泊れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相  
違なければ、其の金を取出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、喜のあまり、  
行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、若し  
此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟  
までも重き罪に到らん。されば、その高恩、なかく  
言葉の言ひ盡くすべきにあらねども、先づ當座の御禮  
までに贈り奉ると、涙を流し喜ぶに、馬方大いに驚きし  
顔色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮  
ごといふことあるべき」とて、手にだに取らず。色々に



こしらへいへども、更に受けずして、歸らんとする故、やむことを得ず、十兩と減らし、五兩となし、三兩となし、一段減らして、終には金二分となし、せめてこればかりは我が心の喜なれば受け給ふべし。さなくては、我が心もすみ申さず、今宵も寐ねがたし」と、理を盡くし詞を盡くしていふにぞ、此の金を受け申すほどならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。これは今夜休むべき所を、これまで追ひかけ來れる賃錢なり。これは我がとるべき錢なれば申し請くべし」とい

ひて、二百文にて酒を買ひ、其の家の人にふるまひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはすぞ」と問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。たゞ我が在所の近所に小川村といふ所あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことあり。某も折節行きて聞き侍りしに、『親には孝を盡くすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず』などいふこと、常々語り給ふにより、今日の金子も、我が物にあらざれば、取るべき理無しと心得しまでの

與右衛門  
藤樹の通稱



ことなり」といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命生きのびて、各方にも對面することとなりぬ」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、其の家の裏に、熊澤治郎八、田舎よりのぼりゐて、學問修業の最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ眞の儒といふものなれ」とて、其の翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし」とて、さらに許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間、其の門に佇みて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり」とにかくに、先づ内へ入れ申せよ」とあ

りし故、いなみがたくて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

其の後、先生を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりとて固く辭し、門人に熊澤といふ者あり。御役にも立つべき者なり」とて、熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。

(東遊記)

備前

備前國(岡山

縣)岡山藩

當時の藩主は

池田光政

東遊記

五卷

遊行記

寛政九年(二

四五七)刊



室生犀星  
名は照道  
小説家 詩人  
明治二十二年  
生

二三 詩二篇

室生犀星

菊

縁側にしやがんで見てみると、  
菊の大輪が暖かく伸びほつれて、  
その長かつた花季はなどきに辿りついたことを今朝  
は思はせた。  
舞ひ下りた鶴のやうに、  
一つ一つ心を籠めて、  
ほつれ整へてゆくのだ。

何といふ鮮かな感銘だ。  
膨り上げたやうに立派だ。  
まるで歡喜に菊は伸び上つてゐるのだ。

山 脈

ある朝、川べりに出て山を見てゐたら、  
「お早う」といふこゑがした。  
わたしも「お早う」と言うた。  
奥山に、雪が、はじめて此處から見えてゐる。  
斑ではあるが、昨日より嚴然としてゐる。

〔出所〕  
現代詩人全集



藤原咲平

氣象學者

理學博士

中央氣象臺技

師兼海洋氣象

臺技師

東京帝國大學

教授

明治十七年生

八丈島

伊豆七島(東

京府所屬)中

最大の火山島

八丈島測候所

中央氣象臺附

屬八丈島測候

所

八丈島大賀郷

村に在る

海洋氣象臺

神戸市神戸區

に在る

二十八日

昭和四年五月

二十八日

### 二四 八丈島行幸

藤原咲平

今度の行幸には、八丈島測候所及び神戸の海洋氣象臺をみそなはせられた。これは氣象事業の光榮として我々の深く銘記し奉らなくてはならぬことであるが、このことを外にしても、數々の忘れがたい出來事を拜した。

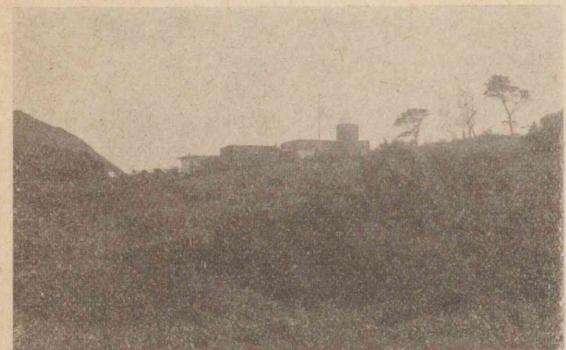
二十八日、八丈島は夜にかけて風雨ともに強く、測候所では秒速十五メートルを測つた。海上は恐らく二十メートルを超えたことであらう。怒號する風聲は濤聲と鬨ひ、御召艦から照射する探海燈は雨脚を射て

悽愴を極め、島民はひたすら大御心の安らかにましま

さんことを祈り奉つた。

不安の中に夜は過ぎた。しか

八丈島測候所  
るにこの大風雨中に御假泊あら  
せられた陛下には、明るる二十九  
日早朝、御豫定どほり御上陸、御巡  
幸あらせられる旨仰せ出された。  
島民が一齊に歡呼したことはい  
ふまでもない。晴れゆく霧とと



もに、島は朝日子の榮光に充ち満ちた。

御巡幸中、大賀郷小學校校庭では、全島民の優良牛、數

大賀郷小學校  
大賀郷尋常高  
等小學校  
大賀郷村に在  
る



百頭を集めて天覽に供し奉つた。

一體、牛に對して美しいといふ感じを持つことは、我日本人には稀であらう。ところが、この日、こゝに集められた、飼ひたて磨きたてた牛の美しさは、全くいひやうのないものであつた。ビロードは美しい。黒狐や貂の毛皮も美しい。併し、それ等は皆死んだもの、枯れたものの美しさである。それに比べて、生きくゝした牛の光澤といふものは、實にたとへやうもなく美しいものであつた。

陛下には、この數百の美しい牛のすべてに限りない愛撫の御眼を注がせられ、御興深くみそなはせられた

が、やがてその中のある一頭に玉手が近づいたかと思ふと、鼻から肩の邊を二三遍撫でさせ給うたとのことである。何といふ自然な、併しまた何といふ尊いことであらう。聞くところによれば、その天恩を忝うした牛こそは、その飼主が常に全島一として誇つてゐたものであつたといふ。

この日、御側近の方々が奉仕に努められたことも亦涙ぐましいものであつた。若い侍従の人々が、長い御行列を、後になり先になりして心を配り、指揮を取られる有様は、誠にめざましいものであつた。明かるく、活潑に、又綿密に、平易に、率直に、粉飾なく、鬚などは四日も



寒々匪躬  
王臣寒々、躬  
の故に匪ず。

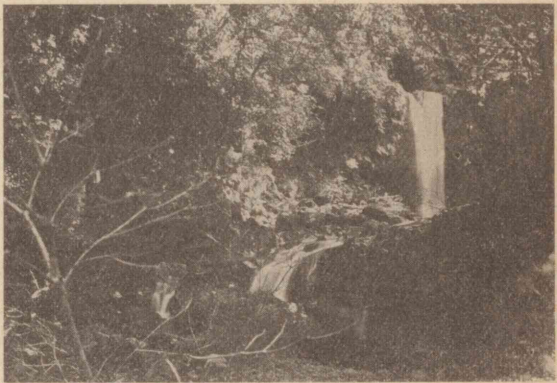
(易經)

鳴澤の瀧  
不動の瀧とも  
いふ。  
八丈島三根村  
に在る

侍従長  
鈴木貫太郎  
海軍大將  
男爵  
樞密顧問官  
慶應三年(二  
五二七)生

五日も剃られない程忙しく立働いてみられるのを見

ては、寒々匪躬なる一句が胸を  
衝いて浮かんだ。



鳴澤の瀧

又、鳴澤の瀧では、海拔千五百  
尺の高さまで、密林をくゞり、巨  
岩をよちて御登攀あらせられ  
たと承る。それが尋常の山道  
ではなく、梯子を用ゐなくては  
登れない所が二箇所もあつた  
といふ。そして陛下の御趣味がこゝにあらせられ、  
ば、侍従長が老體を意とせず、險阻を物ともせず、終始壯

者に勝る意氣を以て御先導申しあげた至誠には、實に  
襟を正さしめるものがあつたといふ。

更に又、御警衛の任に當つた八丈島警察署及び警視  
廳から應援の警官の苦心、又島廳官吏、在郷軍人、青年會  
員等の努力も、言葉に盡くしがたい程誠意の溢れたも  
のであつた。

私は今更のやうに、心から大御代を壽がずにはあら  
れなかつた。



田邊尙雄  
音樂研究家  
國學院大學教  
授  
明治十六年生

### 二五 國歌

田邊尙雄

壹越調旋法  
我が國に於け  
る音樂の調子  
の一

林廣守  
宮内省雅樂部  
長  
大阪の人  
明治二十九年  
歿 年六十六

我が國歌「君が代」の旋律は、國旗日章旗の意匠と共に、世界に對して我が國威を示す標徴であるといつてよい。「君が代」の旋律がすぐれてゐるのは、その壹越調旋法なる一種の音階の魔力と、その眞情の流露とによるのである。然らば如何にして、我が國にはかやうに尊嚴なる國歌が生ずるに至つたか。

我が國歌は宮中の雅樂師林廣守の作曲にかゝるものであるが、それより以前に、一度外國の傭樂師が作曲して、外務省から世界各國へ發表したことがあつた。

その國歌なるものは、日本語の性質を無視した、讚美歌のやうなもので、我が國の國歌としての精神は全然入つてゐないものであつた。一體、我が國の國歌を外國人に依頼して作つたのであるから、その出來上つたものに日本國民の眞情の流露がないのは當然である。

そこで國歌の作り換へを行ふことになり、雅樂部の林廣守が選ばれて、古代の雅樂に則つて作つたのが今の「君が代」である。當時我が國は洋樂が輸入されて間もないことではあつたが、既に洋式の軍樂隊が置かれてゐた。然るに我が國歌がそれ等年少氣銳の洋樂家の手にならないで、宮中の雅樂師、しかもその老先輩の手

當時  
明治十三年頃



になつたといふことは、一寸異様のやうであるが、それが我が國民にとつて幸福なことであつたのである。

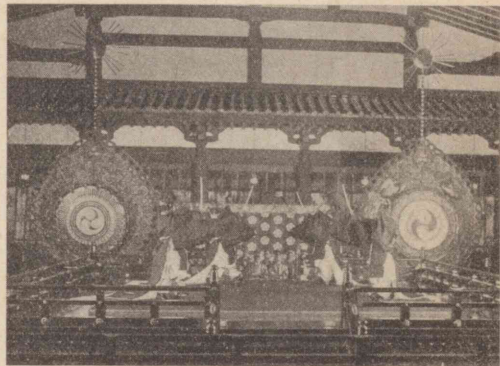
我が上代の音楽は、大和民族の眞情の流露した音楽である。然るに、奈良時代から平安時代の初期へかけては、支那大陸の形式的音楽即ち所謂舞樂が輸入され、大和民族本來の性情を具備した音楽は却つて閉息してゐた。やがて支那が亂れ、我が國から留學生を送ることが出来なくなつたので、輸入音楽は勢力を失ひ、輸入音楽と大和民族本來の音楽との調和が行はれるに至つた。かくして現れた朗詠や催馬樂さいばらなどの音楽は、大和民族本來の性情を整へるに支那音楽の形式を以

朗詠  
雅樂の一種  
催馬樂  
雅樂の一種

てしたもので、こゝに始めて内容形式の備つた日本音楽の成立を見るに至つたのである。室町時代や江戸時代の日本音楽は著しい發達を遂げてゐるけれども、極めて一方に偏したもので、音楽が單なる言語の附屬物となつてしまつた。極端に言へば、音楽は言語の説明に過ぎない有様になつてしまつた。殊に江戸時代の日本音楽は島國的で、大陸に向かつて世界的活動を行はうとする日本にふさはしいものではない。元來大和民族本來の音楽は、大陸的性質を備へてゐて、決して島國的ではない。かの久米舞の雄大で大陸的なことは驚くほどで、外國の使臣は、宮中の饗宴に於てこの

久米舞  
久米歌に附隨  
して作られた  
舞





久米舞 圖

久米舞を見、その結構の雄大に驚歎するといふことである。しかしながら、今日及び將來、我が國が世界に向かつて大いなる發展を遂げようとするに當つて、江戸時代の日本音樂が我等の眞の伴侶ではなく、又世界に誇り得るものでもないと共に、大和民族本來の音樂も、そのまゝではあまりに原始的である。

こゝに大和民族本來の特性を根本とし、それに最もふさはしい形式を與へたのが所謂雅樂であり、これを

大體保留し傳へてゐたのが宮中の雅樂師であつた。その雅樂師の一人が明治の初に國歌「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を備へ、その形式に於ても立派なものであるのは當然である。當時の年少氣鋭な洋樂家は、唯西洋音樂を輸入することに汲々として、これを我が國に同化させるまでには至つてゐなかつた。實際、西洋音樂が我が國に同化するやうになり始めたのは明治三十七八年戰役以後のこと、恐らくこれが眞の同化を遂げるのは將來のこと、に屬するであらう。随つて、我が國歌が若し當時の年少氣鋭な洋樂家の手に成つてゐたとすれば、恐ら



く再三再四その改造を行はねばならないやうな羽目に陥つてゐたであらう。然るに事實はこれに反し、宮中の雅樂師の手に成つて、かくの如く世界に誇るべき國歌「君が代」を得たといふことは、國民のこの上もない幸福であつたといはなくてはならない。

(音樂通論)

國語 女子用 卷一 終

(永井製本)

昭和十三年七月二十四日  
昭和十三年七月二十四日  
昭和十三年七月二十四日  
印刷發行  
訂正再版發行

國語 女子用 全十卷  
定價 各冊 金五拾五錢

版權  
所有



編輯者 岩波編輯部  
代表者 岩波茂雄  
發行者 岩波茂雄  
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
印刷者 白井赫太郎  
東京市神田區錦町三丁目十一番地

精興社印刷

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段一八七二一八八番  
振替口座東京二六二四〇番



